

カードキャプターさくら&リリカルなのはA's~Love in their
hearts~

1202155@

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは、悲しみと再会の物語。

小学5年生の木之本桜は、友人の知り合いである魔導師から、魔法について学びながら『私の一番』たる小狼との再開の日を心待ちにしていた。

2人の訪れた再会の日。それは、新たな闘いの始まりでもあった。傷つき倒れた二人の魔導師。

見下ろすように浮かぶ、四人の騎士。

決意を胸に、彼女は『星の杖』を握る。

星の魔法少女と星の魔導師。2人の魔法使いが交わるとき、希望の虹が夜天を駆け抜け、悲しく血濡れた物語に終止符が撃たれる。

魔法少女リリカルなのはとカードキャプターさくら。誰もが望んだこのコラボ。見逃すな！

《注意事項》

・リリカルなのはは原作よりも学年が上がって小学四年生となります。

・カードキャプターさくら側は小学五年生とさせていただきます！

目次

序幕	1
さくらと魔法の家庭教師	3
さくらとボルケンリッター	
なのはと再会の彼女	12
小狼と夜蘭さん	19
さくらと小狼の再会	26
なのはと襲撃者	35
激戦	43
クロウの末裔と鉄槌の騎士	51
敗北の乙女	59
麩菓子	63
歪みの果てに待ち受ける闇	
二章 序章	74
序章2	78
それは、心に小さく刺さったトゲ	80
夜蘭、オンステージ!	88
復活と愛憎と満開の雷桜	94
Exelion/Assault	100
Diviner琥珀を撃ち抜く、桜色の極光―Buster	

序幕

序幕・ 1

とある、少女の手紙と星へ祈るオオカミ

『シャオランくんへ』

お元気ですか？

私は元気です。知世ちゃんも、お兄ちゃんも、雪兔さんも、お父さんも、皆こっちは元気です。

私は最近、エリオル君に勧められた、魔法の家庭教師さんの元で、魔法のことを週に3回習ってます。クロウカードの使い方とか、闘う時のうまい使い方。あと、マルチタスクっていうのかな？思考を複数に分割して考える魔法を習いました。これが出来ると、勉強しながら、魔法の練習が出来たり、メールが打てるようになるんです！初めて習った時は出来なかつたけど、コツがあるみたいで、それをやったら簡単に出来ました。こんど、こっちに遊びに来た時に、教えてください！

それから、直接電話で伝えるのは恥ずかしいから、手紙で伝えるね。

シャオラン君が来る日、私の家、お兄ちゃんは合宿で群馬に、お父さんは遺跡調査で出張で、ケロちゃんは知世ちゃんが美味しいご飯をご馳走してくれるみたいなんです……。

あ、えつと、だからね。その……よかったら、私のお家に泊まりませんか？

無理には言いません！

そ、それじゃあ……その。だいすきだよ！シャオランくん！
さくらより

P. S. 今度あつた時に、私から言えるようにするからね！』

机の上に広げた手紙を見て、少年は嬉しそうに笑みを浮かべた。それは海を隔てた隣の国に住む、花の名前も持つ少女のことを思い出したからであつた。

最後に会ったのは、夏休みの時。その時は色々とゴタゴタが

あつたが、晴れて二人は恋人同士となった。

「暫くあいつの声、聞いてないな。そういえば」

夏休みの出来事を思い出して、少年は苦笑いを浮かべた。少女にはとても心配をかけたからだ。少年は少女がくれたティディベアをそつと手に取る。それを見て優しい笑みを浮かべた。

「さくら、もうすぐだ。待っててくれ。俺は日本に帰るから」

空を彩る満天の星空。それに誓うように少年は呟いた。

序幕・2少女の夢

少女は夢を見る。

そこは満月の夜なのにも関わらず、銀雪が舞い落ちる幻想的な世界。

甲冑を纏った女剣士と黒いマントと鎌を持った少女が互いの刃をぶつけ合い、火花を散らす。

また、別の場所では、赤いドレスにハンマーを持った少女と白いドレスに金色の槍を持った少女が、互いに鉄球と光弾を撃ち合っていた。

そして、夢見る少女は……

降りしきる雪と同じ髪の色をした、漆黒の翼を持つ女性と向き合っていた。

女性は何かを呟いた。少女はそれに対し首を振るう。女性は悲しげな目をして、少女を見つめていた。

これは、小さな街で起きた、大きな物語。

愛するものを守るために、罪を重ねた五人の騎士とそれを止めるために戦った、五人の魔法使いのお話し。

魔法戦記カードキャプターさくら&リリカルなのはA's

Love in their hearts
始まります。

さくらと魔法の家庭教師

第97管理外世界『地球』

某所

11月31日

午後9時

満月が公園を照らす幻想的な夜。それを背景に一人の可愛らしい少女が静観な表情を浮かべて現れた。

少女は自身の胸に下げられた星の意匠の施された鍵を両手で包み込む。

「星の力を秘めし鍵よ！真の姿を我の前に示せ！契約の元、桜が命じる！リリース！」

そう呪文を唱えた瞬間、少女の身体の周りに魔法の風が舞い、鍵はその姿を杖へと変化させる。少女はその杖をクルクルと回すと、両手で構えた。

「想也くん！勝負だよ！」

「おっしやっ！来いっ！」

少女が目の前にいる少年にそう告げると、少年は勿論と言わんばかりに、自分の武器を構える。それは弓矢にも剣にも見て取れる不思議な武器。異世界の技術で作られたと聞く。

「フライツ！」

取り出したカードを空中へ投げ、それを杖で叩く。すると、少女の背中に純白の翼が現れる。それをはためかせ、少女は夜天の空へと舞い上がる。

対して少年は一瞬で陣羽織を纏い、その手の武器を肩に担いで空へ浮かび上がる。

「やっぱり、想也くんの魔法はいいなあ。カード使わなくても空飛べて、防御も攻撃も出来るんだもん」

「よく言うよ。汎用性と扱いやすさじゃ、そっちの方が上なんだけど……なっ！」

少年が先に動いた。大振りな動作でその武器を振るう。桜は

それを杖で流れるように受け流し、距離を取ると、新しいカードを発動させる。

「ソードツ！」

カードを叩き、魔法を発動させると、杖はその姿を細身の剣へと変える。

「やあああつー！」

「だああありやあああつー！」

お互いの剣と剣がぶつかり合い、火花を散らす。少女は自分の方が力では負けるとわかっているので、持ち前の運動神経を生かして、それをいなし、少年の体制を崩す。

だが、少年も負けてはいない。体制を崩されながらも、武器の弓弦を引く。先端の砲口に光が集まり、離すと同時に光の矢が放たれる。

「シールド！」

杖を使わず取り出したカードをコール（呼ぶ）するだけで発動させる。翼の意匠が施された盾で防ぐ。

（このままショットで……！）

次の一手を考え、カードを取り出そうとする少女。そこへ、注意を促す使いますの声我突然聞こえてくる。

「さくら！次来るで！」

その声で前を向くと目の前には少年が剣を振り下ろしていた。それをシールドで受け止める。だが、如何せん受け止め方が悪かった。この姿勢では、明らかに押し切られて

「くっ！」

「力押しやこつちが……上なんだよおっ！」

「きやあつー！」

押し切られて吹っ飛ぶ少女。それを待ってましたと言わんばかりに、少年はゆっくりと弓を引き絞る。さくらは体制を整えながら、それを確認すると、一回転しながら着地。すかさず、カードをコール（呼ぶ）する。

「ジャンプ！」

カードが腰のケースから現れ、光ると同時に少女は跳躍力を強化。勢い良く飛び上がる。その高さはビル二階分に匹敵する。

少年は思わず、やるねえ、と眩きながら弓を構えたそこにはエネルギーがチャージされた状態の弓があった。

(まずい！)

「相手の行動を見ながら回避。そこは重要よ。お嬢さん？」

あんな威力で撃たれれば、盾なんて意味が無い。そう思った時にはもう遅く、彼女は微妙に痛い無数の矢に貫かれていた。

カードキャプターさくらとリリカルなのは

A, s L o v e i n t h e i r h e a r t s

第一話

『さくらと魔法の家庭教師』

広い12畳ほどある洋風の部屋で3人の男女が先程の闘いの映像を見ていた。

一人は先程杖とカードを使い戦っていた美少女。名前を木之本桜。(以下、さくら)

もう一人は先程、弓矢を使い戦っていた、平々凡々な顔で、長い髪を一括りにした和服姿の少年。名前を立花想也。

最後の一人は、黒髪をストレートにしたこちらもまた美少女だ。名前を大道寺知世といい、この家の主だ。

三人は思い思いの表情で映像を見ていた。

想也は再生されるビデオを見ながら、この対決の良かった点、悪かった点をビデオを止めながら説明する。

さくらはそれを聞きながら、メモを取る。

知世はそれを聞きながら、気になることを質問している。

「ん。ここでジャンプを使ったのは良かったね。出来れば、ダッシュのほうが、良かったかもしれないけどねー」

「ダッシュだと、どういう戦術が立てられるのですか？」

知世の問いに想也は笑顔で頷くとこう答えた。

「まず、ジャンプだと複数の足場が無いと、頭上に一直線にしか飛べな

い。フライはあの勢いだと、体制を立て直すのがやっとなるところだね」

そこまで説明すると一旦言葉を切り、ジュースを飲んでから説明を再開する。

「さて、ダッシュの場合は、話が違ってくる。相手の攻撃もあの速さなら当てられないし、短時間、不規則に動けば、予測出来ないしね。その加速状態でフライを使えば、余計な魔力を消費せずに十分な速さで、空へ復帰出来る」

その説明を聞いて、頷くさくら。

さて、この場を借りて何故、さくらがこのようなことをしているのか、理由を説明しておこう。

一ヶ月前。彼女は不思議な夢を見た。そこで、そのことをエリオルに話すと、彼は手紙で

『ここ数ヶ月以内に哀しい事件が起きる。それを止めるために僕の知り合いの魔法使いを呼びましょう。彼が滞在する間は、彼に魔法などについて習ってみてはいかがでしょう？とても勉強になるものばかりだと思います』

こうして、哀しい事件を解決するために現れたのが、さくらの目の前にいる立花想也だった。

彼の教え方はとても面白かった。最初は単純にさくらカードの召喚からはじまり、次は二枚、三枚、四枚の同時召喚を行い、現段階では、五枚の同時召喚と長時間における連続魔法行使・持続が可能となった。また、実戦訓練と言う形で、彼と一週間に一度、模擬戦を行うことも、さくらにとっては新鮮だった。想也の住むところではそういう教え方が当たり前だと言う。魔法と言うものを詳しく理解せず、教えられても、使い魔であるケルベロスことケロちゃんのカードの知識だけだったさくらにとっては、想也から教えられた魔法についての知識や技術は、学ぶ価値があった。

閑話休題

そうこうしているうちに、昨日の反省会が終わった。さくらは今日の朝に書いた反省文を想也に手渡した。

「はい、想也くん。これ、反省文」

「はい。確かに受け取ったよ」

渡したさくらは安堵の溜息をついた。それが気になったのか、想也が訊ねてくる。

「どうしたよ。そんな溜息について」

「うん。今日の朝、それ忘れそうになっちゃって……」

「ほおー。忘れたら面白かったのになー」

「ほえええーっ!?やだよー!町内120週なんてーッ!」

反省文の書いてあるノートやさくらからカードなど、授業で忘れ物をした時は、ペナルティが与えられる。そのペナルティはあまりにも凄まじく、内容を見た瞬間、さくらは震えが止まらなかったほどだ。ちなみに、想也曰く「やって出来ないことはないだろ?死ぬ気でやれば問題ない」とか。

内容よりも彼の発言のほうが大いに震えたた。

「ふふふ。でも、ちよつとドジなところがさくらちゃんの可愛いところでもありますわ」

彼女の親友である知世が口に手を当てて、おほほほ、と笑う。

それを聞いて、想也も肯定するように花で笑った。

さくらはそれについて、講義する。

「ちよ、ちよつとお!私、ドジじゃないもん!今日はたまたまだもん!」

そう言って頬を膨らませるさくら。それを見てその場にいた全員が笑った。

ひとしきり笑った後で、知世が手を叩いた。

「さてと、そろそろお昼ご飯にしましょうか」

知世の意見に真っ先にケルベロスがくいついた。

「よっしや飯やあああつ!なあなあ、知世く、今日の飯はなんなんやー?」

ケルベロスがそう叫ぶ中、さくらは一人、窓の外を眺めた。

そして、一枚のカードを取り出した。

それは最愛の彼と自分の中を取り持った一枚のカード。半年

前に起きた『無のクロウカード封印戦』で生まれた、さくらの作り出したカード。『希望』を眺める。

「シャオランくん……」

カードを眺めながら、最愛の彼の名前を呟いた。先日送られてきた手紙によれば、香港でやらなければやらないことも、粗方、終わったようで、細々したことは、日本にいても出来るらしい。なので、明後日、12月2日の夜ごろにはさくらの家に向かうと書いてあった。(私のお家に来るってことは、つまり、そ、そそそそ、そう言うことだよね)

さくらはシャオランが自分の家に泊まるのだと思い、一人顔を赤らめる。同時に様々なことを思考する。

(ダメダメダメダメ！私からしようなんて言ったら、シャオラン君に嫌われちゃうよ！それにこう言うのは、利佳ちゃん曰く、男の子はどうしてもそう言うのがマン出来ないって言うし……男の子から来るものだって……)

様々な葛藤で頭がいっぱいのさくら。

そこに誰かが声をかけてきた。

「おう。どうしたよ。顔めちゃんこ赤くして」

「ほっ……」

「？」

「ほえええええええーっ！」

一瞬驚きと共に声を漏らし、虚をついたところで、叫び声を上げる。

想也はその攻撃を受けて、床に倒れる。思わぬ攻撃に受け身が取れなかったようだ。

「さ、さくら……どういうわけか、説明してもらおうか……と、知世」
「はい。なんですか？」

知世が返事をする。想也は耳を抑えながら、わけを話す。

「この赤面妄想娘の話しを聞いてくる。飯は先に食っててもいいぞ」
「いえ。待ちますわ。皆さんで食べた方が美味しいですもの」

そう言うと、知世は微笑んだ。想也はそれに対して、ありが

とと頷いた。

さくらも知世に礼を述べると、想也に頭を掴まれ、ズルズルと引きずられていった。

大道寺家の庭。そのベンチに腰をかける二人。想也はどこからオレンジジュースを取り出すと、それをさくらに渡した。さくらは取り出したことに対して、疑問を投げかける。

「それも想也くんの魔法」

「ん？ああ。まあ、どっちかって言えば、お前らの魔法に近いんだけどな」

そう答えて、オレンジジュースを飲む想也。コスモスの咲いた庭を眺めながら、さくらに問いかける。

「何をそんなに葛藤してたんだ？」

さくらはもじもじとした、はつきりしない態度を取る。想也はさくらの顔を盗み見る。顔が真っ赤で、目が潤っている。その症状がなんなのか、一瞬で気付いた。

「彼氏のことか」

「ブフーツー！」

チビチビとか飲んでいたオレンジジュースが彼女の口から噴き出し、コスモスにかかった。想也はなるべく彼女の方に目を向けないうようにする。

「か、かかかかかか……彼し……シャオランくんが、わわわ、私の彼氏……はにゃくん……」

狼狽えたような口調の後で、ひじょうに蕩けた表情を浮かべるさくら。

(この様子じゃ、彼氏って言葉を理解はしていても、実感わかないって感じだな)

そう思った彼は、スツと手を上げ、彼女の脳天めがけて、チョップを叩き込む。ちなみに角度は斜め45度。

ガゴンツッ！

凄まじい音がすると、さくらは頭を抱えて、蹲っていた。

※さくらちゃんフアンの皆さんすいません。想也はさくらちゃんを唯一殴ることの出来る、破天荒なキャラなんです。

「い、痛い……」

「たり前だ。痛くしてんだから。んで？彼氏のことでも悩んでんだろ？
そう言うのは経験がある。聞かせてみな」

想也がそう言つて笑みを浮かべると、さくらは引きつった表情で想也に訊ねた。

「想也くん、彼女さんがいるの？」

「ああ。いたな」

さくらがそれを聞いて驚いたが、すぐに咳払いをして質問する。

「お、男の子を……女の子の家に泊まらせるのは……いけないことですか？」

単純な質問に想也は鼻を鳴らしながら、答えを述べた。

「まあ、特別なことだろうさ。特に家族がいないときに家に誘う行為ってのはさ」

「特別な行為？」

「ああ。男の子はオオカミだかな。家内で二人つきりになりや……
どうなるかわからん」

想也は肩を竦ませた。自分もこのことについては経験があるからだ。どこか後悔してるのかも、と今の行動を客観的に見て気付いた。

さくらは、オオカミと言う言葉に反応し、眉間に皺を寄せ、唸る。

想也は近くの屑籠目掛けて、オレンジジュースを放り投げた。それは綺麗な放物線を描いて、小気味いい音とともに屑籠に入る。

「男の子を家に招き入れるってのはさ、有る意味キス以上のことをしてもいいよって意味になるんだ」

その瞬間、ボンツ！と言う音がした。振り向くと、さくらは顔

を真っ赤にして、頭から蒸気を吹き出しながら、ほえほえほえ、と呻いていた。

「ほえ〜……き、キス以上……ほえ〜、い、一体どんなことすればいいんだろ〜ほえ〜、わたし、とんでもないこと……」

「落ち着けよ。そんな悩む必要はねえ。そうなるのにもちゃんとムードつてもんが必要なんだ。それに、キスするのもムードが必要なんだよ。したくないなら、そう言うムードを作らないようにしとけばいい。どっかの大阪弁の使い魔なんかを交えてな」

そう言つて不敵に笑う想也。さくらはそれを聞いて頷いた。

「恋愛なんてのはさ、誰もみんな、小難しく考えてるんだよ。実際は簡単なもんで、悪いことしたら、ごめんなさい、してくれたことに対して、ありがとう。それで、相手の顔を見て話す。これから始めりゃ、大抵はうまく行くからよ」

それを聞いてさくらは自然とさつきまでの恥ずかしがりが消えて、正常な思考に戻つてゆく。

それを横目に想也は心の中で盛大にため息をついた。

（あーあ。そんな恋愛経験豊富じゃねえんだけどな）と。

さくらとボルケンリッター なのはと再会の彼女

6月3日 PM9:05

海鳴市 中丘町

閑静な住宅街の一角に八神と表札のついた一軒家がある。このごく普通の一軒家に住むのは、足が不自由な少女ただ一人。他は誰も住んでいない。ひっそりと悲しい静寂だけが、その家を覆っていた。

少女は車椅子を手で動かしながら、電話が置いてある場所まで向かう。電話のボタンが点滅している。おそらく、留守電が入っているのだろう、と考え、そのボタンを押した。

《ルスデンメッセージ、イツケン、デス》

機械的な音声の後で、メッセージが再生された。

《海鳴大学病院の石田です。明日ははやてちゃんのお誕生日よね？良かったら、検査の後に一緒にお食事でもどうかなって思っ、お電話しました。明日病院に来る前にお返事くれたら嬉しいな》メッセージ、ハ、イジヨウ、デス》

それを聞いて少女は悲しそうに小さなため息をついた。

本来であれば両親や親類が誕生日を祝ってくれるはずなのだが、そのような親類は彼女にはいない。悲しいことだが、幸いにして、物心ついた時から車椅子で生活をしていたため、ヘルパーなどを雇う必要もなかった。知り合いと呼べるのは、先程電話してきた、石田先生くらいで、近所の人達ともまともに話したことさえない。

そのような生活をずっと続けてきた彼女は次第にこう思うようになっていた。

(私はこのまま、誰も知らないうちに、この家で朽ち果てて、死ぬんやろか)
と。

ずっと前に買い物に行ったときに風の噂で聞いた、何でもネガイを叶えるというお店。そんなお店があれば彼女はすぐにでも、何もか

も投げ捨てて、こう願うだろう。

「家族を私に下さい」と。

だが、現実になんか店があるわけ無いし、あつたとしても、法外な料金を請求されるだろう。

彼女は段々と誕生日を越すごとに自暴自棄になつていった。

「よいしょ」

慣れた手つきで車椅子からベッドへ移り、横になる。そして、ベッドライトを付けて、風芽丘図書館から借りた本を読み始めた。

暫く時間が経ち、彼女は眠気を覚えた。ふと時計を見ると、時刻は午前0時に差し掛かったところ。

「もう、こんな時間か……早く寝ないと、明日に触るな……寝よ」

彼女の心を唯一癒してくれるもの。それは、本の世界。とくにファンタジーものは彼女のお気に入りだった。彼女はスッキリした気持ちで布団をかけようとする。だが、そこで違和感に気づいた。本が浮いていたのだ

「」

《起動》

ドイツ語でそう告げる、茶色のハードカバーに銀色の鎖が交差するように巻かれた高級そうなその本は、気付いたときにはこの家にあつたようにおもう。多分、父か母のどちらかが残した本なのだろう、とはやては勝手に思っていた。毒々しい紫色の光を放ちながら、心臓が鼓動するような音ともに、本はその鎖を引き千切らんと、動く。やがて、勢いよく鎖は引きちぎられ、本はページをバラバラとめくつてゆく。そして再び閉じられると、本はゆっくりと少女の元に降りてくる。そして、驚きと恐怖の入り混じった少女に近づくと、再びそれが、光だした――。

side.なのは

朝。太陽の光が寒空に登り、海鳴市を照らし出す。

その市の一角にある家では、一人の少女が眠っていた。女の子らしいピンクのカーテンが特徴の部屋だ。

机の上にはこれまた、ピンクのガラパゴス携帯が充電されている。どうやらピンクは彼女のパーソナルカラーのようだ。少しして、携帯のアラームがなる。それと同時に液晶画面に『6:30アラーム』運命の日』と表示される。そのアラームがなる少し前に少女は起きていたのか、アラームが鳴った直後に、その携帯を取り、アラームを解除。携帯をそっと、抱きしめた。

《おはようございます。マスター》

机の上に大切に置かれた紅い宝石のついたネックレス。それが点滅しながら、英語で挨拶をする。少女はそれに対して笑顔で返す。「うん！おはよう。レイジングハート！」

彼女の名前は高町なのは。彼女の見た目は至極普通の女の子だが、今年の春にその常識を覆す不思議な出会いと、闘い、そして、最愛の友人と巡り会った。

偶然出会った淫獣もとい、ユーノ・スクライアという少年を助け、彼から貰ったレイジングハートを武器に、魔法少女として、ジュエルシードという、人の願いを歪めて叶える宝石を集めていた。

その途中で出会った同じくジュエルシードを集める少女。フェイト・テスタロッサとの出会い、そのジュエルシードを集める中で、フェイトとすれ違い、ぶつかり合い、お互いを理解する。悲しいこと、辛いことを一緒に乗り越えてゆくことで、なのはの思いは彼女へと伝わり、二人は友達になった。

閑話休題。

今日はそんな彼女と半年ぶりに再会出来る大切な日だった。

身支度を整え、彼女は玄関を勢いよく飛び出し、走り出した。

「
」
辿り着いたのは海鳴湾の見える海鳴海浜公園。なのはは、膝に手をついて、下を向いて息を整えた。

すると、一人の少女がゆっくりと振り向いた。少女は驚いたような表情を一瞬浮かべ、やがて静かに笑みを浮かべた。

「ただいま、なのは」

涼やかな、だが、優しい声で彼女はそう言った。なのはは涙と笑顔を同時に顔に浮かべると、勢いよく抱きついた。

「おかえりーフェイトちゃんー!」

二人は離れていた時間を埋めるように、抱きしめあった。

海鳴市にある大きな一軒家。近くに人気の喫茶店『翠屋』があることや、駅から近いこともあり人気の住宅地に出来た家だ。その家に女性が引越して来た。彼女の名はリンディ・ハラウン。時空管理局に所属している。階級は提督だ。

彼女は受け取った荷物の整理をしながら、新居を眺める。長い間、次元航行艦に詰めており、住居も時空管理局・本局の居住ブロックで暮らしていた彼女にとって、こういった普通の家で暮らすのは、久しぶりであると同時に、長年の夢でもあった。

ここで暮らすのは彼女だけでは無い。

「リンディ提督、もう荷物は運び終わったよ」

長髪の女性が彼女に話しかけて来た。リンディはそれを聞くと、そう、と頷いて、お茶にしましょうか、と言って女性を座るように促した。

女性の名前はアルフ。彼女は人間では無い。死にかけた狼がとある少女によって、使い魔という魔導生命体として生まれ変わった姿だ。

その少女の名をフェイト・テスタロッサ。

半年前に起きた、プレシア・テスタロッサ事件。通称：P・T事件の際、主犯であり、実の母であったプレシアの命令に従い、『ジュエルシード』を管理局と奪い合った少女だ。その事件の際、彼女は母を失い、使い魔であるアルフと二人きりになってしまった。

彼女は、罪を償う代わりに、囑託魔導師として管理局に務めることになった。だが、管理局では、親がいなければ、局員になることは出来ない。そこで、リンディは彼女を養子として引き取り、この家で暮らすことに決めたのだ。

閑話休題

引越し業者から受け取った荷物を粗方片付け終えた二人は、休憩していた。リンデイはカップに口をつけ、緑茶に牛乳と砂糖を混ぜた緑茶を飲む。その横では、アルフが湯気を出すコーヒーを前に顔を紅くして座っていた。リンデイは彼女が何か言いたそうにしていることに気づいたが、気付かない振りをする。アルフが自分から何かを話してくれることを望んでいるからだ。

「あ……あのさ……」

アルフが恥ずかしそうに声を上げる。リンデイは優しい表情を浮かべて、首を傾げる。

「フェイトのこと……ありがとね。あれから色々守ってくれたりとか、大好きなのはと同じ学校に通わせてくれてさ」

リンデイはふふ、と笑いながら、あたりまえよ、と言った。

「あれだけ苦労したのだから。少しくらい、フェイトさんの我儘を叶えて上げたいわ。それに、親族を無くした悲しみは、ずっと心の中に重くのしかかるわ。ましてや、目の前で失ったのなら尚更……ね」

思い出されるのは、プレシアの今際の際。フェイトはプレシアを助けようと手を伸ばした。だが、彼女はそれを拒み、アリシアと身を共にした。

今思えば、あれはプレシアなりの贖罪なのかもしれない。

何の贖罪なのか……。フェイトを傷つけ、モノ扱いはしたことに對してか、娘を生き返らせようとしたことに對してのものなのか。それはプレシア本人にはわからない。だが、推測することはできる。落ちてゆく彼女の表情はどこか、悲しさと後悔と少しの安堵が入り混じった風に見えた。それはまさしく、子を思う親の表情。

（それを言っても、フェイトさんを悲しませるだけ……ね）

そのことは誰にも話さない。一つは過ぎたことだから、もう一つはフェイト本人のことを考えているからだ。養子になる子に、実母のことを聞くのは、タブーだと、彼女は思っているからだ。

（まあ、時が解決してくれるかしらね）

難しく考え過ぎた、と思ひ、クッキーを口に入れた。優しい甘み

が口に広がる。それが、彼女の思考を溶かしていくリンディは緑茶をのんで一息つくと、アルフに提案する。

「お茶が終わったら、一緒に買い物でも行きましょう？この世界のことは、まだあまり分からないから、案内とか、フォローとか、よろしくね？」

「うん。まかせてよ！」

アルフの言葉を聞いて、リンディは笑顔を浮かべる。アルフも恥ずかしそうに、だけれど、嬉しそうに笑った。

その様子は、傍から見れば、親子のようにも見えた。

時空管理局 本局。それは、傍から見れば、建物に見えない。巨大なデブリの内部をくり抜き、最下層に造船および、艦船ドックを設け、その上に本局の施設を置いている。

その艦船ドックを見渡せる、連絡通路を、二人の男女が進んでゆく。一人は時空管理局執務官、クロノ・ハラオウン。もう一人は、そのクロノの親友であり、執務官補佐でもある、エイミイ・リミエツタ執務官補佐である。

二人は所属する、次元航行艦アースラの次の任務を受諾するため、直属の上司である、レティ・ロウラン提督のもとに向かっている途中だった。本来であれば、この仕事は、艦長であるリンディの仕事であるのだが、現在彼女が不在であるため、艦内で彼女の次に役職の高い、二人が向かっていた。

「失礼します」

提督室に入る二人。デスクには一人の女性が座っていた。彼女がレティ・ロウラン提督だ。レティは二人を見ると笑顔を浮かべて、隣の応接室へ案内しようと立ち上がった。

「久しぶりね。クロノ君、エイミイ」

「お久しぶりです。レティ提督」

「ご無沙汰してます」

挨拶を交わした二人。クロノは促されるままに、エイミイとともにソファに座る。レティはクロノにある少女のことについて尋ねた。

「クロノ君、フェイトちゃんは怎么样了たかしら？」

「はい。無事現地入りしました。今頃はなのは達に挨拶をしているところでしょう」

「そう。なら大丈夫ね。リンディもしばらくはゆっくりできるでしょう」

そういつてから彼女は親友とその養子の身を案じる友の表情から一遍、仕事の話をする表情へ変わる。その表情を見て、二人は思わず息をのむ。

「さて、今日ここに来てもらったのは、クロノ君にお願いしたい仕事があったからなの」

そういつて彼女は空中投影ディスプレイを操作し、いくつかの資料映像を宙に浮かべた。それには傷ついた管理局局員や、魔法生物が横たわる映像が映し出されていた。それを見た二人は思わず顔をしかめる。

「違法渡航グループの追跡と確保。主な犯罪行為は、大型魔法生物の狩猟行為と魔導師を狙った略奪」

「りや、略奪って……」

エイミィが驚愕する。魔導師を狙って略奪行為を働くということ、管理局に喧嘩を売っているようなものだ。つまり、相手は管理局と面と向かって戦えるだけの戦力を持っているか、もしくは少数精鋭の実力者集団のどちらかだ。

そう考えていると、レティが説明を続けた。

「みんな奪われているのよ。魔導師の魔力の源……リンカーコアが」

そういつてレティは自分の胸を指さした。

クロノとエイミィはその言葉に、言い表せない不安が重くのしかかってきた。

小狼と夜蘭さん

海鳴空港。

その到着ロビーに1人の少年が降り立った。彼の名前を李小狼。中国の有名な導師の家系である、李家。その本家の長男として生まれた彼は、とある任務を遂行するため、再び日本に訪れた。普通なら、日本に来ることは大変嬉しいのだが、今回はその気持ちよりも、恐怖が勝っていた。何故なら、その傍には、彼が苦手とする人物がいた。

「小狼、先程も言いましたが、男女七歳にして席を同重せず……。さくらさんの家に泊まるなど、言語道断です。わかりましたね？」

「分かっています……。母上」

本来であれば、彼は今夜、一人でさくらの家に向かい、さくらと二人つきり（実際は三人だが）で過ごす筈だった。ところが、その手紙を偶然、彼の姉に見られてしまい、あろうことか、その騒ぎを注意しに来た、彼の母。李夜蘭に聞かれてしまい、こっ酷く叱られた上に、母相手の死ぬ気の剣技と魔術の訓練。さらには、二人つきりで過ごすのを阻止する為に、小狼について来たのだ。

夜蘭は小狼のそれを阻止するだけでは無く、他にも用事があるのだが、それがあることを小狼は知らない。

「小狼、友枝町はどんなところなんですか？」

夜蘭が優しい口調で問いかける。小狼はキビキビした口調でその問いに答えた。

「はい。過ごしややすい町です。交通の便も良いですし、何より、物価も安い。暮らすにはこの上ない場所です」

「そうですね……。なら、食材には困らなさそうですね。腕によりをかけて、料理を奮えそうですね。さくらさんに」

「い!?は、母上がお料理を作られる必要はありません。お、俺が作りますから!」

小狼はビックリした表情を浮かべた後で、すぐに首と腕を振って反対する。夜蘭はそれを見てため息を吐いた。

「小狼、私は料理を作れます。そんな、作れない前提で否定するのは

やめなさい」

「ですが……」

「これは決定事項です。さくらさんには、我が家の味を堪能して貰いたいのです」

夜蘭の言葉に小狼は渋々、引き下がった。こう言いだしたら母が止まらないことは分かっているからだ。

「よろしい」

そう言うと夜蘭は小狼とは違う出口に向かおうとする。それを小狼が不思議そうに見ていると、小狼に告げる。

「さて、小狼。貴方は先にさくらさんの家に向かいなさい。私は少し、知り合いに会ってから、向かいます」

夜蘭は去っていった。小狼は深々と溜息を吐くと、ゆつくりとした足取りで、友枝町方面のバス乗り場を目指すのだった。

小狼と別れた夜蘭は空港に隣接されたカフェに来ていた。

もう数十年にも渡る付き合いを持つ友であり、職業柄、物品を交換して来た間柄でもある。そんな友に彼女は会いに来たのだ。

「久しぶりね。夜蘭。また若くなつたかしら？」

「貴女がそれを言うのと、皮肉に聞こえてよ。侑子」

からかい半分、挨拶半分といった様子で声をかけてきたのは、黒髪を腰まで伸ばした女性。夜蘭はその女性、彼女の名前は壺原侑子という。夜蘭はその挨拶にツツコミを入れると、座るように促した。

「じゃ、失礼して」

「貴女と会うのは、彼が死んでからかしら？」

「そうねえ。もうソナニ立っていたのね」

そう侑子が呟いて、儂げに空を見た。その理由を知っている夜蘭はそれを問わずに、懐から一枚の写真を取り出した。

「侑子。今日、貴女を呼び出したのは、アレが見つかったからなのよ」

「……そう。だと……思ったわ」

侑子は写真を見て、ほう、と息を吐き、写真を見る。そこには、剣十字の飾りのついた茶色い本が荒い画質で写っていた。

「我が家の執事達が偶々転位するところを見つけてね。その反応を探った結果、友枝町がある海鳴市に転位したことが分かったのよ」

侑子は一瞬驚いた表情を見せたが、その理由に気付いたのか、なるほどね、と呟いた。

「強い力を持つものは、災い呼びやすい……かつての貴女がそうだったけど、まさか、彼女がいる場所に転位するとは……ね」

そう言う侑子は煙管をフーツと蒸かした。白い煙が喫茶店の天井に揺蕩いながら、登って行く。夜蘭は、ええ、と呟くと悔しげな表情で答えた。

「私の11年前はまだ、終わってないのだから……」
と。

ぼやくとした表情でさくらは外を眺めていた。彼女の目には光が無く、窓の外で色付いた栞も彼女の瞳には写っていない。それもそうだ。彼女は現在、とある病に侵されているのだから。

(小狼くと久しぶりに会える……)
恋の病だ。

彼のことを思い出すだけで、彼女は幸せになると同時に、心が躍り、何も考えられなくなる。そして、電話などで声を聞いた瞬間は……頭の上から湯気が出て、天にも登る思いだ。恐らく会えない日々が待ち遠しいため、自然とそうなってしまうんだろう。実際に会ったらどうなるかはわからない……。

(小狼くと会った時に変な声を出しちゃったら……どーしよ。あ、でも、小狼くんは笑ってくれるかな?)

さくらは手を頬に当て、はにゃくん、と呟いた。

その瞬間、さくらは視線に気付いて前を向いた。ハツとして前を向く。すると、丁度朝の挨拶をしようとしていた、担任の寺田先生と目が合った。寺田先生は首を傾げ、さくらに訊ねた。

「どうしたんだ、木之本。驚いた表情をして。先生の顔に何か付いてるか?」

「あ……いえ。すいませんでした」

さくらはそう言つて謝ると、顔をリンゴのように真っ赤にして、俯いて縮こまつた。

寺田先生はそれを見ると、再び不思議そうに首を傾げたが、咳払いをすると朝礼を始めた。

休み時間になると、朝の出来事について知世が訊ねて来た。

「さくらちゃん、先程、李くんのことについて考えていらつしやいましたね?」

「!?」

どうしてそのことを!?!、と言わんばかりに驚いた表情と共にさつと一歩引くさくら。そんなさくらに知世は、おほほほ、と口に手を当て、笑つた後で言つた。

「さくらちゃんのことなら、なんでもお見通しですわ!」

「あ、ははは……」

さくらは苦笑いをその顔に浮かべた。

「苦笑いと言えばね!」

「ほええええつ!?!」

突然、知世とさくらの間に一人の男の子が割つて入つた。驚いて声を上げるさくら。現れたのは山崎貴史。同じクラスの友人だ。

「18世紀のフランスではねえ、貴族の前で笑つたりしたら……それはそれは恐ろしいことになつたんだつてよく」

と、彼はこのように、そこはかたなく蘊蓄のように聞こえるホラを話すのだ。当然、これはよく考えてみればわかることだが、言われたことを、ストレートに受け取つてしまうさくらは当然、彼の話をまとも信じてしまうのだが……。

「お、恐ろしいこと?」

「そう。とおーつても、恐ろしいことだよ。この世のものとは思えー」

「山崎くん!またそうやって法螺をさくらちゃんに言つて!」

山崎の足を女の子がギュムツと踏みつける。山崎は目を開けて、話すのを止めた。彼の足を踏みつけたのは三原千春。彼の幼馴染であり、恋人だ。

「ねえ、さくらちゃん、今日は小狼くん帰って来るんだっけ？」

山崎の口にガムテープを貼りながら、千春が訊ねてくる。それに
対し、さくらは嬉しそうに頷く。

「さくらちゃん、嬉しそうだね」

千春がさくらの表情を見て、そう言う。すると、当たり前だよ、と
言わんばかりに別の女の子がさくらの代わりに答えた。

「好きな人に久しぶりに会うんだもの。嬉しくないわけないよ」

そう答えたのは、歳の割に大人びた仕草や口調が特徴的な佐々木利
佳だった。彼女の言葉にさくらは顔を真っ赤にして俯く。

「ふふ。さくらちゃんはまだ、恥ずかしいか」

「仕方ないよー。相手が李くん。だもんねー」

「ふふ。でも、そこがさくらちゃんの可愛いところでもありますわ」
いつものやりとりで、休み時間が過ぎてゆく。友枝小学校は、今日
も平和だ……。

バスの窓から過ぎてゆく景色を眺めながら、小狼は頭の中で、彼女
に出会った時の挨拶を考えていた。

（やっぱり、ここは気さくに『よお、さくら』か……？いや、それとも
『ハアア、久しぶりだね。愛しのMyスイートハニーのさくら
ちゃん☆』か……？）

そう考えて、小狼は即座に吐き気を覚えた。2番目の選択肢は無い
な、と思った。こんな歯の浮くことを言ったら、彼女が恥ずかしさで
茹で蛸になり、気絶するだろう。それどころか、彼女の使い魔のケル
ベロスには絶対に大笑いされる。それは、小狼の高いプライドが許せ
なかった。ので、2番目の選択肢を却下する。

（……こういう時は……）

取り出したのは、如何にも胡散臭い本。タイトルは『恋愛初心者も
だいじょーV！これを読んで、貴方も彼女と結婚までのロードを突っ
走れる！』と書いてある。その本はかなり読まれているのか、所々に
付箋が付いている。小狼は迷うことなく付箋の付いたページを開く。
（何々……《久しぶりに彼女に会った時はいつも通りの挨拶をした後

で、抱きしめましょう。もし、それが出来ないのであれば……頭を撫でてあげましょう。身体に触れるということは、彼女を何より安心させてあげられる行為なのです》……なるほど)

書かれてあることを見て、頷いていると、隣に人が座ってきたことに気づく。小狼は邪魔にならないように、端っこに詰める。その人は女性なのか、柔らかい声で「ありがと」と呟いた。小狼は軽く頷くと、再びその本を読み始めた。

どれくらいしたろうか。小狼はふと窓の外に目を向けようと顔を上げる。そこで、隣の女性がこちらを見ていることに気づき、女性の方を向く。女性は小首を傾げ、こちらを見ていた。その目の色は銀色と鳶色のオツドアイ。吸い込まれそうなほど、澄んだ色をしていた。女性は何か納得したようにポンと手を叩きながら、ああ、と小さく声を出した。小狼は怪しさを覚え、睨みつける。すると、女性は魅惑的な笑みを浮かべて、呟くように小狼に話しかける。

「流石は李家次期当主候補。中々いい力を持つてるみたい……ネ」

小狼の中で、彼女に対する怪しさがさらに増した。

「何故、俺の名前を？」

「そうだねー……私も同じ力を持つからかな？」

そう言うと女性は突然小狼に向かって腕を突き出してきた。咄嗟のことに小狼は頭を傾けて避ける。女性は相も変わらず魅惑的な笑みを浮かべて微笑んでいた。その腕の先へ伸びた指先は降車ボタンを押していた。

「さあ、李くん。降りないの？」

「はっ」

「ぼーっとしてないで、ここ、友枝町だよ？」

その言葉に小狼はびっくりして窓の外を見る。言われて見てみれば、確かに、見慣れた景色が広がっていた。小狼は急いで荷物を纏め、バスから飛び出してゆく。女性は、楽しそうな笑みを浮かべると、小狼に続いてバスを出た。

バスを出た2人は向かい合った。小狼は下から彼女を睨みつける。普通の人であれば少しは怖がりそうなものだが、彼女はそれに動じ

ず、不思議そうな笑みを浮かべて頭を下げた。

「初めまして。橘百家流本家・陰陽術師の橘寺蘭草と言います」

和かにそう言われ、小狼は頭を下げる。

橘百家流……中国の陰陽五行説を元にした陰陽術式を使う流派のことだ。李家と並ぶほど、古い歴史を持つと、言われており、近代の陰陽術の元を作ったとも言われている。現在も新しい陰陽術の使い方を探し、研究している。

閑話休題

小狼は、それで、と呟いて問いかける。

「どうして橘百家流の人間が、俺に接触してきたんだ？」

何か裏がある、そう睨んだ小狼は自分に接触した理由を訊ねる。だが、女性があっけらかんと答えた。

「とくに理由は無いよ。偶々君を見かけたから、声をかけただけ」

小狼は理由を聞いて、拍子抜けしてしまうと同時に、深く考えていた自分がバカバカしくなり、ため息をついた。

「……ハア……まあいい。俺はやることがあつてここに来た。出来れば邪魔はして欲しくない。じゃあな」

そう言つて、小狼は友枝小学校方面に向かって歩いていった。

さくらと小狼の再会

橘寺神社。

古くから続くこの神社は、日本でも珍しい、神と仏を両方祀っている所で、広大な敷地の中には霊園も存在する。海鳴市の市民にとつては、ある種、神聖な場所というよりは、憩いの場として使われていた。お年寄り杖を突きながら、併設された庭園を歩き、カップルはベンチに座りながら、作つた弁当に舌鼓を打つたり、イチヤイチャしたりしている。

また、神社の一角にある小高い丘の上に大きな杉の樹が生えている。樹齢900年の樹で海鳴市の人からは海鳴杉と呼ばれて親しまれていた。その樹の下では、一人の少女が冬の暖かな陽を浴びながら、読書をしていた。足は不自由なのか、車椅子に乗っている。もう、ご存知だろう。八神はやてだ。彼女は時折この場所にやって来ては、こうして本を読んでいるのだ。彼女は厚手のコートと足にブラケットをかけ、本を読んでいる。ここは、日当たりが良いため、冬でもそれなりに暖かいのだ。

その彼女の近く。草の上に座り、昼寝をしているのは橘寺想也だ。彼は橘寺神社の次男坊ではあるが、時空管理局の囑託魔導師として週三日任務に勤め、それ以外は神社の手伝いをしている。今日は偶々暇なので、幼馴染であるはやてに付き合っていた。

「なあ、想也くん？」

「んー？」

はやてが何気ない口調で想也の名前を呼ぶ。彼は気の抜けた返事をする。

「何でもない。ただ呼んだだけやよ」

「そっかー。呼んだだけかー」

「んもー、張り合いないなー。もうちょっと、こう、なんかあるー」

「はやて」

「なんや？」

「呼んだだけー」

「ッー！」

からかおうとしたら、逆にからかわれてしまい、はやては言葉にならない叫びを上げる。それを見て、想也は得意げな顔で起き上がると、はやての鼻を指先で突いた。

「年上をからかおうとするからこうなるんだよーへへ」

「あーっ！ちよつと?!まちー！」

そう言っただけで想也の手を掴もうと、手を伸ばすはやて。しかし、車椅子に乗っているため、自由に動けないので、想也の手は掴めなかった。はやては、頬を膨らませた。

「もう、想也くんはわたしが自由に動けへんの知ってるくせに、そうやってすーぐ、逃げるんやから。男らしくないでー！」

「怒るなよ。今度おやつ作ってやるから」

「ほんとやね?!言質取ったで!約束やよ?」

はやては想也の作るおやつが大好きだった。喫茶翠屋のような洗練された味では無く、家庭的で素朴な味わいが好きなのだ。だが、そんな彼の大好きなお菓子をいつまで食べることが出来るのかを思うと、不安になった。

彼女は生まれつき足が不自由だった。理由は筋肉が硬直しているからだ、海鳴大学病院の石田先生が言っていた。治療や薬の投与をしているが、それも効果なしだった。

(いつまで生きれるんやろうな……わたし)

彼女は心の中でそう呟いた。その表情は悲しい程、嬉しそうな笑顔を浮かべたまま。一瞬、その笑顔を見て、想也が迷ったような、困ったような表情を浮かべたが、その後には彼も優しい笑みを浮かべて、はやての頭を撫でてきた。彼女は嬉しそうな笑みを浮かべると、先ほどの言葉を撤回した。

(想也くんの為にも、生きよう)

触れられた暖かさを胸に、はやてはそう心に誓い直した。

川沿いの道を夕暮れに染まりながら歩く2人の少女がいた。高町なのはとフェイト・テスタロッサだ。2人は学校の帰りである。2人

と言っても、学校の帰りなのは、なのはの方であって、フェイトは使い魔であるアルフの散歩がてら、明日から通う学校の通学路確認の後で、なのはと共に帰ることにしたのだ。

朝に再会した時は長く話せなかったが、今はお互いに出会えなかった数ヶ月間の出来事について話していた。殆どはビデオメッセージなどに録画した内容もあったが、やはり、きちんとした受け答えをすると、話が弾んだ。

やがて、話す内容が尽きると、フェイトは恥ずかしそうに、彼女の名前を呟いた。

「なのは……」

「？」

彼女が笑顔で首を傾げた。その目は光を受けて、蒼く澄んで見えた。フェイトは意を決して彼女に話した。

「あのね、なのは。私、この世界に来たばっかりだから、その……色々と迷惑かけると思うんだ。だから、色々教えてくれたら、いいな」
「恥ずかしそうにそう告げるフェイト。すると、なのははその手を掴んで、嬉しそうに頷いた。

「当たり前だよ！私だって、きっと同じことを言うもの」

満面の笑みを浮かべてそう答えるのは。そして、頭を下げた。

「宜しくね！フェイトちゃん！」

「うん。宜しく！なのは！」

そう言うと、二人は手をつないで夕暮れの道を帰っていった。

友枝町にある、木之本家。そのリビングでは、さくらが顔を赤くしてソファに座っていた。時刻は午後16時55分。後5分ほどで約束の時間になる。

心臓が早鐘を付くように鳴る。それを感じ、さくらは胸元を掴んだ。

(落ち着かなきや……小狼くん心配させたらいけない……)

大きく息を吸い、そう心の中で唱える。すると、自然と心臓の鼓動がゆっくりになってくる。

(よしーこれでー
ピンポーンッ！)

大丈夫。そう思ったところへ、来客を告げるチャイムが鳴った。それに驚きつつ、さくらはドアカメラで誰が来たかを確認した。

「!!」

さくらはその人物を見た瞬間、勢いよく玄関に向かっていった。

チャイムを鳴らした小狼は落ち着いた様子で、家主が出てくるのを待った。暫くして、ドタドタと慌てるような足音が聞こえてきた後で、扉がガチャツと開いた。

そこにいたのは、共に背中を合わせて戦うと同時に最も会いたいと願った少女。辛い修行の最中も彼女から貰った手紙と写真で何とか乗り切ることが出来た。小狼は、万感の思いがこみ上げてくるが、それらを制し、たった一言、彼女に告げた。

「久しぶりだな、さくら」

その一言が彼女を、さくらの顔を笑顔にするのには十分だった。その直後、さくらが彼に抱きついた。

「おかえりなさいっ！小狼くん！」

勢いよく飛びついてきた彼女を小狼は驚きながらも、しっかりと抱きとめる。表情は余裕そうにしているが、彼の内心はドギマギしていた。

(ヤバイ……こんなにいい匂いなのか……さくらって……それに、こんなに柔らかいし……それに……前より可愛くなってるのか!?)

久しぶりに出会ったことで、余計そう感じた小狼。そんな小狼を、さくらがじーっと見つめていた。それに気付き、小狼は気まずそうにさくらに問いかけた。

「ど、どうしたんだ……さくらっ」

「えっとね……小狼くん、難しい顔してるから、どーしたのかなーって」

そう言われ小狼は急いで鏡を見た。すると、確かに言われた通り、難しい顔をしていた。それに気付き、小狼はため息を吐くと、さすが

に内心でどう思っていたか、は話せないため、ポンツと頭を撫でながらこう告げた。

「気にするな。俺の悪い癖だ」

笑顔でそう言うのと、さくらの顔がカーッと赤く色付いてゆく。それを見て、小狼の顔もまた、赤くなるのだった……。

それから暫くして、二人は家の中に入った。お茶を淹れながら二人は、近況報告などをした。

「……っというわけなんだ」

「そっか……小狼くんは向こうに帰ってたのは修行するためだったんだね」

「ああ。色々大変だが、いい経験になった」

小狼は手紙でもさくらに修行のことについて話していたが、大まかなことしか書いていないため、修行していた細かい背景や理由などを説明する。それをさくらは目を輝かせて聞いていた。

「どんな修行をしたの？」

「ああ。そうだな……やはり、今まで使っていた魔法は古い魔法らしい……お前のさくらカード然り、俺の魔法然り……だから、そう言う古い魔法を元に、現代風にアレンジされた魔法の修行をしたんだ」

「そうなんだ」

「ああ。これが結構大変だな。元素記号だったり、数式だったり、色々学ばなきゃいけないんだ」

「うわー。やだなー。私には出来ないかも……」

「そう言うと思った。お前は、算数が苦手だもん」

「だって……難しいんだもん！」

「まあ、俺も国語が苦手だからな……なんとも言えないけどな」

そう言っつて、苦笑いを浮かべる小狼。それに吊られて、さくらも笑った。

「そういえばお前もー」

「さくらー！」

「へ？」

「お前じゃないもん！さくらって呼んでよ！小狼くん！」

「え……あ……悪い」

「久しぶりに会ったのに、『お前』なんて他人行儀な呼び方は酷いよ……」

そう言つて頬を膨らませ、拗ねるさくら。小狼はそれを見て、困つたような表情を浮かべた後で、言い直した。

「さ、さくらも魔法の修行していたつて言つてたが、どんなことしてたんだ？複数の魔法を同時に使える……とか書いてあつたが……」

「んつとね……こういう感じかな。話しながらカードの魔法が使えるんだよ！」

そう言いながらさくらは、手にした鉛筆を軽く振ると一瞬光つた。それを小狼に渡してきた。

「小狼くん、食べてみて！」

「これをか!？」

「うん。失敗してないと思うから、大丈夫だよ」

笑顔で鉛筆を食べるように勧めてくるさくらに、小狼は若干恐怖を覚えながらも、口に啜えた。すると、口の中にほんのりと甘みが広がる。小狼はその瞬間に何のカードを使ったのか理解した。

「……なるほど。『甘』を使ったのか……杖も使わないで使えるなんて。お前の魔力は底なしだな……」

小狼は呆れと尊敬の念を言葉に込めながら、そう言つた。それに対しさくらは胸を張つた。

「うん！想也くん曰く、まだ伸びるんだつて！」

「ブツ！」

目を輝かせながらそういうさくら。だが、小狼の耳に彼女の言葉が入っていなかった。何故なら、彼の目は、さくらのある部分を注視していたからだ。

(あいつ……案外とあるんだな……)

さくらの胸を見て、小狼はそう思った。前見たときは、お互いに忙しく、事件の最中だったため、そう言つた感情は湧かなかつたが、香港の知り合いによつて、ソツチ方面の知識を教わつた彼は『そういう

目』で見てしまった。

(ーツ！何を考えてるんだ！さくらにそんな感情を抱いて！俺はバカかつ！あーっ!!そんなことなら、あいつにそんな知識を習わなきゃよかった!!!)

「ねえ、小狼くん」

頭の中で自分のことを恥じていた小狼。そんな彼さくらが、呟くように彼の名を呼んだ。その声に顔を上げると、さくらが恥ずかしそうな顔で小狼の隣に座った。そして、彼の肩に寄り添うように、頭を乗せた。

「ねえ、小狼君。今日は私のお家に泊まれるの？」

「……悪いな。母さんにばれたから、泊まれなくなった」

「そつか。なら、しょうがないね」

「ああ」

その返事を境に二人は何を話していいのか分からず、黙ってしまふ。ようやく次の話題を思いつき、小狼がそれを口にしようとした瞬間、彼の第六感が危急を告げるように何かを鋭敏に感じ取った。それはさくらも同じなのか、二人して勢いよく立ち上がった。

「さくらー！」

「うん。何か大きな力が一か所に集まってるみたい……結界……それも封絶型のタイプかな？」

「え？どういうことだ？」

小狼はさくらの感覚の鋭さに驚きを隠せなかった。自分の力では、ただ魔力がそこに集まっているくらいにしかわからなかったからだ。それについて小狼が問うと、さくらは簡単に答えた。

「魔力が外に向いてなくて中に向いて動いてるように感じたからかな……」

「この距離でそれが分かるのか……」

「うん！修行してたら、いつの間にかできるようになったの！」

それを聞き小狼は呆れを通り越して感心した。昔からそうだが、さくらは魔法に関しての知識は殆どない。だが、観察力や感覚、魔力量などはどれをとっても小狼を上回る。知識と技能で戦うのが小狼だ

とすれば、さくらは経験と直感で戦うタイプだ。おそらく、さくらに魔法を教えている師匠という人物は、さくらのその特性を理解したうえで、さくらと戦い、実戦経験を積みせっつ、魔力探知の方法を学ばせていたのだろう。実技一辺倒でここまで学べてしまうさくらもさくらだが、そのさくらの特性を理解し、学ばせる師匠という人物に対して、小狼は尊敬の念を抱いた。そのことはお首にも出さず、さくらに場所を尋ねた。答えられると思ったからだ。しかし、返ってきたのは、否定を示す首振り。

(やはり、そこまではわからなかったか……)

習いたてで、どういう種類の結界が分かれば十分だと割り切ると、小狼は鞆から敵の位置を割り出すことのできる道具を取り出す。それはL字の形をした棒のようなものだった。その短い方を左右の手で一本ずつ握る。さくらが、それに対して純粹に訪ねてきた。

「あやく……それ、ダウンジング・マ——」

「違うツ——これは、李家に由緒正しく伝わる、魔力探知棒だ！」

「え？でも……」

どう見てもダウンジング・マ——に見えるのか、もう一度話したが、小狼は必死でそれを否定する。さくらはその様子を見て、追及するのをやめた。さすがに好きな人のプライドをズタボロにするのは気が引けたからだ。

「魔力を感知すると、この棒がグルグルと回転するらしいが……」

そう言っつて、小狼は棒を持って外に出ようとする。その瞬間、棒がグルグルと高速で回り始めた。それを見て二人は目を丸くする。と言っつても二人とも全く違った理由で、驚いているのだが。

小狼の方は、こんな近くで回るとは思っていなかったこと、さくらの方は、ホントに回るんだ、とそれぞれ心の中で思っていた。

「どうした、そんな鳩が豆鉄砲撃たれたような顔して」

そんな軽口と共に現れたのは、さくらの魔法の師匠にして、時空管理局・本局嘱託魔導師、立花想也だった。

探知棒は彼を指し示し、クルクルと回り続けている。そんなシュールな光景の中で、想也は親指で明後日の方向を指さし、不敵な笑みを

浮かべて、二人に告げる。

「逢引の最中失礼！悪いが、これからカチコミに行くぞ。結界の中にな！ケルベロス！」

突然現れたことに驚く二人。そんな二人を無視し、行き先を告げた彼は、さくらのケルベロスを呼ぶ。すると、リビングの窓が開き、その先にある庭に本来の姿である翼を生やしたライオンへと変わったケルベロスが降り立った。

「小僧にさくら！厄介さんが目を覚ましてしもうたようやで。詳しい話は移動しながらしたるさかい。はよ乗り！」

ケルベロスの只ならぬことを予想させる口調に、先程までふざけ半分だった二人は、一気に真面目な表情に切り替え、お互いに頷くと、ケルベロスに跨った。二人が跨ったことを確認すると、ケルベロスが大空目指し、大きく翼をはためかせ、飛び立った。

なのはと襲撃者

夜。高町なのはは自室の机で明日の予習をしていた。魔法の訓練に重く比重を置いていた彼女にとって、この予習が唯一、学校の勉強についていくための方法だ。なお、授業中は専ら、レイジングハートのイメージトレーニングで、フェイトやクロノを仮想敵とし、常に戦っている。その際はマルチタスクで思考を二つに分割。片方をイメージトレーニングに、もう片方を授業を受けている。

「!!」

算数の問題を解こうとした瞬間、第六感に痺れるような感覚が走った。それは、この半年の間で磨き続けられた魔法の感覚。どこかで、他人が魔法を使っていることを、それ、が告げた。

「!!レイジングハート!」

《ええ。封絶型の捕縛結界ですね……。囲まれました!》

相棒であるレイジングハートに訊ねると、レイジングハートは冷静に発動した魔法について、なのはにレクチャーする。

「どっちからくるの?」

《右舷より高速で来ます!》

「そっか!じゃあ、外でないとだね!》

《yes! My master!》

封絶型ということはこちらの位置をある程度把握し、かつ、接触か何かを凶るために張ったということだ。恐らく前者だろう。そうかんがえるとなのはは、外へ出た。

ビルの屋上で一人の少女が見覚えのある茶色いハードカバーの本を従え、眼下の大地を見下ろしていた。開かれた本を見て、彼女は、何か決意を固めたように前を向いた。その身体が光に包まれると、その装束はゴシック調の真紅のドレスへと変化する。その手には、ドレスには似つかわしくない、少女の身の丈ほどの大きさを持つ、無骨なハンマーが握られていた。

「行くぞグラールファイゼン!」

《Ja!》

ハンマー……グラーファイゼンにそう語りかけると、少女は地面を蹴り、勢いよく空を飛んだ。

12月とはいえ、まだ本格的な冬の到来では無いが、夜ともなれば、突き刺すような寒さが何も覆われていない顔や手に襲いかかってくる。だが、そんなことに構っていられるような状況ではない。なのはは辺りを見渡し、敵がどこからくるのかを確認する。

《後方より来ます!》

その声に反応し、振り向いたなのは。同時に、どの方向から攻撃を受けてもいいように、全方位防御魔法『プロテクション』を発動させる。その直後、銀色の鉄球が正面から襲いかかって来た。それを易々と受け止める。だが、その直後にレイジングハートが注意を促した。
《マスター!後方より来ます!》

その声に振り向くと赤いドレスを来た少女が何かを振りかぶり、叫びながらやってきた。

「テートリヒ・シユラークツ!」

強烈は打撃が防御を介して、襲ってきた。それに顔を顰めるなのは。だが、勢い任せに放たれた一撃を受け止めきれぬ訳もなく、彼女は吹っ飛び、ビルの屋上から投げ出されてしまう。

「レイジングハート!お願いっ!」

空中を落下してゆく感覚に一抹の不安を感じながらも、なのははレイジングハートの名を叫び、光に包まれる。やがて、光が収まると、そこには聖祥小学校の制服をモチーフに袖口が青く染まり、胸元に赤いリボンの飾り紐が結ばれた戦闘防護服―バリアジャケットを纏ったなのはの姿があった。

「空戦魔導師……やっぱりか!」

なのはを襲った少女はそう呟くと、手にしたハンマーに弾丸のようなものを数発込める。なのはは突然襲われたことに疑問を抱き、問いかけた。

「どっの子?なんでこんなことするの?」

そう問いかけるが、少女は無表情でなのはを見つめる。痺れを切らしたなのはは、レイジンググハートをデバイスモードから、砲撃型の力ノンモードへ切り替える。そして、それを構えた。

「いきなり襲い掛かられる覚えは無いんだけど……」

「そつちに無くて……こつちにはある！アイゼンツ！」

《エクспロージョンツ！》

少女の手に持つスパークを起こし、その瞬間、一気に魔力が増幅する。その瞬間、なのはとの距離を一気に詰め、彼女の身体めがけてハンマーを振り下ろす。

《フラッシュムーブ》

すんでのところまで飛行加速魔法『フラッシュムーブ』を発動させ、回避するなのは。すかさず背後を取ると、レイジンググハートを少女に向けた。環状魔法陣が回転しながら、敵を捕捉し、バレルを固定する。

「教えてくれなきや……！」

《テイバイン！》

「わからないってばあああつ！」

《バスター！》

桜色の極太の閃光が紅の結界の中を駆け抜ける。そのあまりの魔力流に少女は驚きながらもすんでのところまで逆制動をかけ、飛行魔法をキャンセルし、自由落下することで、回避する。だが、そのせいで頭に被っていた帽子が、燃えてしまう。それを見た少女は一瞬、悲しげな表情を浮かべるが、すぐさま顔を上げる。その目は憎悪の青に染まり、顔は怒りに染まっていた。

「……ッ！」

「？レイジンググハート……」

《ええ。どうやら、怒らせてしまったようです》

いきなり襲い掛かれ、迎撃した拳句、逆ギレされるといって、なんとも相手勝手な状況になのはは苦笑いを浮かべながらも、クロノやユーノから受けた魔法の訓練の中にあつたとある科目で学んだことを思い出した。

『なのは、君が魔法の訓練を受けていることは、君の使い魔から聞いた。だから、僕からも君用のメニユーを送らせてもらおう』

『わあ！ありがと！クロノ君！』

『……と言っても、メニユーを考えたのは僕だが、それを組んだのは僕の親友なんだけどね』

『？』

『そいつは、《訓練の鬼》とまで言われていて、管理局では有名なんだ。囑託魔導師だが、教官の資格も持っている面白いやつでね。そいつにお願いして、君のメニユーを組んでもらったんだ』

『うっ！それは、自主トレーニングよりも厳しそうだねえ……』

『ああ。そいつから君のために送られたメニユーは三つある……一つは――』

「相手の状況をよく見て。どう行動するか、予測を立てること」

訓練を思い出し、なのはは、それを口にしながら実行する。

（あの子は帽子を燃やされて怒ってる。つてことは、飛び道具や弱い攻撃はしてこない。そうなる……）

《破壊力の強い、強烈な一撃を放つて来ますね》

（そうかも……レイングハート、アレ、行ってみようか）

《出し惜しみは無し！ですね。いい判断です。マスター》

『二つ目は砲撃魔導師にとって、重要になってくる自己強化魔法だ』

その言葉を胸になのははレイジングハートを片手に持ち替え、天を示した。

「自己強化！」

《ティフェンサー・ブースト！》

桜色の光が体全体を覆い、なのはの身体を包み込む。優しい光だが、力強さも兼ね備えていた。

「アイゼン！カードリッジ・ロード！ラケーテンフォルム！」

少女が叫ぶと、ハンマーはスパークし、姿を変える。平の打突部位だったものは、片側に推進器、片側にドリルのついた、無骨で凶悪無比な武装へと変化する。少女はそれをしっかり握りしめると、推進器

が点火し、勢いよく回転する。その姿はまるで、絵面こそ違うものの、荒馬の手綱を握るようにも見えた。推進器の推力で加速した少女はとてつもない軌道で、飛び回り、勢いをつけると、数回の軌道偏向を行った後で、なのは目掛けて突っ込んで来る。それを阻止すべく、なのはは誘導弾ーデイバインシューターを最大発動弾数である5発展開し、迎撃する。しかし、そのあまりの推進力にそれら全てが当たることなく、回避されてしまう。

「弾いて逸らす！……なんてのは無理かな！」

《全くです！》

片手を前に突き出し、空中に魔法陣型の足場を作り、靴底に魔力を流し、魔法陣型の足場に足を吸着。しっかりとした土台を作り上げ、少女の攻撃を受け止めた。

「くっ……ううっ！」

「こんのヤローツ！」

ガリガリとバリアが削れる音がしているが、自己強化のお陰で、防御出力が高くなっているため、破られることはない。勿論、少しでも気を緩めれば、危ういだろう。

（防いでも攻められなきや意味がない！………だったら！）

なのはは、足の固定を解除し、そのまま相手の動きを利用し、自分の身を引いた。

（限られた自分の魔法特性と技の中かから、最善の手を選び……）

拮抗していた力が急に無くなると、人はどうなるのか？

答えは簡単――。

「なっ!？」

「アクセル！」

《レストレリクトロック！》

拮抗する対象を失った少女は、その勢いのまま、有らぬ方向へと吹っ飛んで行く。そこへ、加速のコマンドを受けて、弾速の速くなったデイバインシューターが少女の左右に直撃し、推進力を失わせる。すかさず、レイジングハートがレストレリクトロックと呼ばれるバインドを発動。それにより、少女は空中で固定されてしまう。

必殺の足掛かりを整え、構えられたレイジングハート。その目に迷いは無く、再び環状魔法陣が展開される。敵を捕捉。先程よりもバレルが展開される。

「デイバイイイイーン！」

トリガーコードを目一杯叫び、魔力をチャージする。この技こそ、なのはが半年前の実戦から学び取り、今日まで磨き上げてきた、切り札の一つ。真正面からぶつかり、話し合うという、一直線で真摯な彼女の姿勢が見て取れる技。その名も――

「バスターアアアッ！」

《フルバースト！》

デイバインバスター・フルバースト。拡散反応炸裂砲撃であり、魔力反応がある限り、撃ち終わるまで爆発し続けるという、ハメ技とも言わんばかりの砲撃だ。それをまともに受け、目の前の少女が倒れたところで、拘束し、この町に滞在する、リンディの元に連れて行くのが、なのはとレイジングハートの考えた作戦だ。

「やったかな？」

《直撃は免れないはずですが……》

久しぶりの砲撃に痺れる手を振りながら、未だ煙の立つ砲撃の撃ちこんだ方向を見るなのは。だが、煙が晴れた瞬間、その顔は驚きに染まった。なんと、少女は無事だった。それどころか、ピンピンしている。その理由にすぐさま気づいた。彼女の前には赤紫と群青の障壁が展開されていたからだ。

「やれやれ……まさか、昨今の魔導師がここまでやるとは思わなかったな……」

「ヴィータ一人で十分と思っていたが……侮っていた」

「シグナム……ザフィーラ」

「ヴィータ。落ち着いて闘えば勝てたものを……焦るな」

ピンクの髪をした女性と青いノースリーブに身を包んだ獣耳の男はそう話すと、ヴィータと呼ばれる、襲いかかってきた少女を窘めると、ピンクの髪の女性が前に出、なのはに話しかけてきた。

「仲間が世話になった……名乗らせて貰おう。私はヴォルケンリッ

ターが将。剣の騎士・シグナム。こやつはレヴァンティン」

突然名乗られて、驚くのはだったが、すぐに落ち着きを取り戻し、名乗り返した。

「せ、聖祥小学校四年、た、高町なのはです！」

「小学生……そうか、主と同じ年か……」

何か小さく呟くと、シグナムは腰に収まった剣を抜き払った。その瞬間、刀身が火を噴きあげ、炎に染まる。

「あれも魔法なの!？」

《マスターのご友人と同じ魔力変換資質保持者のようです。こちらは炎ですね》

剣から炎が噴き出したことに驚くのは。レイジングハートはそれについて、助言した。

「いい眼をしている。この歳でそれだけの面構えが出来るとは……行くぞ」

その声と共にシグナムは真正面に向かってきた。なのはは、その速さに驚きながらも、フラツシユムープで短距離加速し、後方に下がりながら、デイバインシユーターを発動。弾幕を展開し、迎撃する。だが、その攻撃も意味を成さず、全て、切り払わらることもなく、剣を振るった際の余波熱で相殺されてしまった。

「緩い。剣一本で数百年も闘ってきた私にそのような誘導弾でッ！」

距離を詰められたなのはは、闇雲に杖を振るい、打撃を与えようとする。だが、それすらも軽くあしらわれ、拳句にレイジングハートが真っ二つに叩き斬られてしまう。

「ッ！レイジングハート!？」

「思うなッ！」

レイジングハートを斬られたことへの驚きで、無防備になったなのはに、すかさずシグナムの斬撃が襲いかかった。

(ごめん……フェイトちゃん、ユーノくん……もう、会えないかも……)

「お邪魔、させてもうよー」

命を失う覚悟をしたなのは。だが、そんな彼女に軽快な口調で誰かが話しかけてきた。と同時に、ガギンツと金属同士がぶつかる耳障りな音が響いた。ゆっくり眼を開けると、そこにいたのは、黒の鎧兜に白の陣羽織を纏った戦国武将のような出で立ちをした、鎧武者が立っていた。鎧武者とシグナムは暫くつば競り合いをした後で、彼に押し切られる形でシグナムが後方に飛び下がった。

「直接会うのは初めてだな。クロノの気にしたお嬢さん。おいらは立花想也。時空管理局・囑託教導官だ」

そう名乗ると、戦国武将は弓と刀の一体化したようなデバイスを構えた。

激戦

遡ること数刻前。結界の上に3人と1匹の影があった。読者の皆様ならお分かりだろう。半年ぶりによく直接触れ合うことがなかった李小狼と木之本桜。二人を乗せるケルベロス。そして、彼女と彼の魔法の家庭教師である、立花想也だ。想也は器用に飛行魔法を使いながら、空中で胡坐をかく。その前には、『剣』と『翔』を維持しながら、杖を変化させた剣で結界を切りつけているさくらの姿と、別の方向で、その口から炎を吐き出し、結界破壊を試みるケルベロスの姿があった。しかし、それらの攻撃を受けても、結界は斬り裂かれることも、碎けることも、ましてや罅が入ることもなかった。

「予想以上に固いな……この結界」

「ワイの炎がきかへんなんて……嘘やん！」

ぜえぜえと息を切らしながら、ケルベロスは落ち込んだ様子で結界を見る。想也はポンと手を叩いて何かに気付いたように3人に説明する。

「あ、こいつはベルカ式の魔法か！だから効かないのか……」

「ベルカ式？」

「超古代の対人戦闘用魔法のことさ。使い勝手は悪いが、一対一での戦いなら負け知らず……すぐれた使い手は『騎士』なんて呼ばれてる。いまでこそ廃れてる魔法だが……厄介だなあ」

腕組して悩む想也。さくらは、そんな、と悲痛な声をあげて結界の中を見る。その中では、幼い少女が傷つきながら戦っていた。自分よりも幼いが頑張っているというのに、ただ指を咥えて見ていることしか出来ないのか、そう考えると彼女は悔しさと胸が張り裂けそうになる。小狼はさくらの思いに答えるかのように、立ち上がり護符を取り出した。

「『雷帝招来！』」

詠唱を唱えた瞬間、青い稲妻が夜空を駆け抜け、轟音と共に結界に直撃するが、そんな彼の攻撃も虚しく、結界を破壊するには至らず、ただ煙を上げるだけだった。

「くそ……」

苦々しくそう呟くと、小狼は風花招来を唱え、ケルベロスの背中へ戻ってゆく。そんな彼に想也が助言をする。

「お前らの魔法は、一部の例外を除いて、物体破壊には向いてない。出来て封印か、破魔やら、細かな操作と持続性が高い魔法くらいで、一発逆転・大ダメージ！を与えられる魔法には向いてない……だったら……」

そう思わせぶりに呟くと、デバイスを大きく横に振るう。すると藍色の魔法陣が彼の足元に展開される。

「ミッド式の結界破壊で穴を開ける！その隙に飛び込め！」

素晴らしいながら彼は、デバイスを天高く掲げ、詠唱し始める。

「『集え星屑！天より降り注ぐ鏝の雨となれ……！』」

小さな魔力球がデバイスの切っ先に現れると、それは魔力を吸い上げて巨大化していき、やがて大玉ほどの大きさになった。彼はデバイスを勢いよく振り下ろし、結界に向かってそれをぶつけると、デバイスの弓弦を勢いよく引く。

「星屑の雨ツ！スターダストツ！」

(結界内、反応確認ツ！バレル収縮。結界破壊モード！)

膨大な魔力が分裂し、鏝型の魔力弾に生成されていく。その光景はさながら星が生まれているようにも見えた。そんな神秘的な光景に思わず感嘆の呟きを上げる小狼とさくら。

準備を終えた想也は最終詠唱を唱え、勢いよく弓弦を離した。

「レインツ！」

その瞬間、膨大な魔力の雨が、轟音と共に、結界に向かって飛んでいった。それらは最初こそ弾かれていたが、何十発も同じ場所を狙われれば、さすがの結界もその固さも意味を成さなくなり、貫かれていく。最初に穴の開いた

暫くして、不自然に鏝が放たれない場所を見つけ、ケルベロスは二人に声をかけ、そこに突っ込んでいった。

「見つけた！あつこに突っ込むで！二人ともしつかりつかまつときい！」

自身の出せる最大速度で穴に向かって突っ込むケルベロス。ふと下を見れば、女性の剣士が想也の魔法を防御しながら立っているのが見えた。

（あれは想也がどないするやろうし……今はパツ金の嬢ちゃんを助けるのが先や！）

そう心の中でつぶやくと、ケルベロスは飛び去って行った。

降り立った想也は、なのはとシグナムの間に立つと愛機である、エクスシアを構える。シグナムも想也の構えから、何かを感じ取ったのか、上段に構えた。それを見た想也が軽口混じりにシグナムに話しかけた。

「流石は炎熱変換資質保持者。構えは上段……火の構えってか？」

「……武術がわかると見える……だが、私は負けるわけにはいかん！」

その言葉の後に二人は動いた。その速さに目を丸くするなのは。瞬きするよりも速く二人は鏢迫り合いを行っていた。

「これは……中々！」

「へっ！地球人を舐めんなよ？」

シグナムが高速で技を繰り返す。それを想也が力強い太刀筋で払い、隙を見つけては切る。シグナムがフェイトのような高速戦を得意とするならば、想也はなのと同じ、防御に秀でたタイプなのだろう。数度の打ち合い・斬り合いの末に、シグナムの唐竹割り、一瞬速く、想也の逆袈裟が互いの身体を切り裂いた。

「一ツ！」

すんでのところで致命傷を避けたのか、シグナムの騎士甲冑は裾の部分に切れ目が入り、下の素肌には薄っすらと切れる。一方、想也は額から少し血を流れていたが、特に問題は無いのか、平然と立っていた。「これは侮っていたようだ……すまん」

「いや。それはごっちもさ」

互いに不敵に笑うと、お互いに距離を取った。

想也は手を広げる。そこに現れたのは兜。それを頭に被る。

一方のシグナムも愛剣であるレヴァンティンに指示を出すとその身に魔法の鎧を纏う。

「さて、ここからが本番だ！」

「こちらもなー！」

そう言つてシグナムはレバンティンを一度納刀する。そして、勢いよく抜き払つた。それはシュランゲ・フォルム……連結刃へと変わった。

「こりや厄介だ……なっ！」

無数の刀刃が犇めく姿はまるで刀刃の海。その海の中に想也は突っ込んだ。シグナムは巧みな操作でその幅を狭めていき、想也を引き裂こうとする。だが、想也もそんなことをしようとしているのは百も二百も承知。そう簡単にやられるわけにはいかないと、弓弦を引いた。

「シングル……シューツト！」

鏃型の魔力弾が真っ直ぐシグナムに向かって放たれた。その射撃はシグナムに驚きとバランスを崩させるという効果をもたらした。それにより、乱れる刀刃の配置。だが、相手も歴戦の勇士。すかさず、元の陣形に刀刃を立て直す。だが、その時には想也はすでにその刀刃からギリギリ包囲網から逃れられる距離に立っていた。

「ハアアアッ！」

「クツ……オンノオオオオッ！」

再び距離を詰めるべく、射撃魔法ーシュートバレットを展開し、自動発射モードにして射撃をしながら、突っ込む。弾幕を張り、向かってくる刀刃を片っ端から弾く。

「射撃魔導師で剣技もそこそこ！これがこのような出会いでなければ、どれほど心踊ったか！」

《エクスプロージョン！》

「踊らせてあげるよ！僕とエクシアが！」

《全くもってその通りさ！烈火の騎士よ》

久しぶりの激闘に二人のいや……正確には二人と二機の心が高鳴った。想也は弓刀を振るい、シグナムはそれを捉えようと、連結刃

を生きているかのような不規則に動かし、エクシアは射撃魔法で迫る刃を撃ち返し、レヴァンティンはカートリッジをロードして、久しぶりの主人の心踊る闘いを補佐していた……。

復帰した少女こと、ヴィータは盾の守護獣ファイラとともにもう一方の強い魔力反応があった結界の反対側に向かって飛んでいた。

「ヴィータ、わかっているとは思いますが……冷静に戦え。わかったな？」
「分かっているっの。帽子も治したし、落ち着いてやる」

先ほどのものによって、その大半を焼かれてしまった帽子は修復魔法を発動させることで、復活させた。この帽子は彼女が慕う、幼い主なら貰った大切なものだったのだ。故に

（今、向こうはなんか乱戦になってるみてーだけど……とりあえず、こっちのデケエ方から魔力蒐集してトズラしねえとー！）

そう考えた瞬間、目の前に金色の閃光が落とされた。その後で轟音が響き渡る。

「なっ!？」

「電撃魔法!？」

突然のことに驚き、足を止める二人。その雷光が収まり、その先にいたのは、黒いマントに金色の魔力刃を展開させたデバイスを持った金髪の少女。少女は赤いその眼を真っ直ぐ見据え、二人に向けて名乗った。

「時空管理局・囑託魔導師。フェイト・テストロッサです。管理外世界での無許可魔法使用と傷害罪で貴方を逮捕します」

名乗ると同時に見せられたのは逮捕状。それを見てヴィータは、チツと舌打ちをした。ここまで管理局の動きが早いとは思わなかったからだ。恐らく、先程自分が襲った少女は管理局と何かしらの繋がりがあったか、もしくは、現地に管理局員が滞在していたかのどちらかだ。恐らく後者だろう、と考えると、己の浅はかな考えに怒りを覚えると同時に仕方が無いと考えると、そのイライラを相手に向けた。

「うつせえ！パツ金チビ！邪魔する奴はー

「サンダーエッジ！」

《サンダーエッジ！》

戦闘態勢を取り、鉄球を取り出したヴィータだったが、その鉄球が一瞬で斬り裂かれた。目の前にいたはずのフェイトはいつの間にか、後ろにいたザフィーラとその刃と拳を交えていた。

「！」

「ツグウー！」

バチバチとスパークが走る。フェイトの力一杯の斬撃はザフィーラには威力は弱いが、いつまでも受け続け流には少しキツイ。どうするか、迷っていると、そこへすかさずヴィータがやってきた。

「テートリヒー！シユラアアアアック！」

ヴィータの打撃がフェイトを襲う。絶対に当たった。そう、二人は確信した。だが、それは直前で防がれた。

「おっとっとー！ウチのフェイトに手を出したら、ガブツと痛い目見てもらう……よっ！」

現れたのはフェイトの使い魔、アルフだった。ヴィータは防がれたことに苛立ちながらも、ザフィーラと共に一度距離を取った。

（ザフィーラ。お前、あのオレンジの犬耳野郎を頼む）

（心得た。ヴィータ、お前が戦う少女は速さだけならシグナム以上だ。気をつけろ）

（おうー！）

念話での作戦会議を終えると、ヴィータは鉄球を取り出すとそれを打ち出した。フェイトがそれにいち早く気付き、不規則な機動で弾丸を避けようとするが、それが誘導弾だったことにより、上手く回避が出来ず、体勢を崩すような危うい回避の仕方をしている。

「ぶちぬけええええっ！」

「くっ！」

隙を見て、グラーフアイゼンを撃ち込むヴィータ。ギリギリ、デイフェンサーで防いだフェイトだったが、体重と獲物の物量、さらに飛行魔法で加速させた、強烈な一撃を防げるわけもなく、早々にデイ

フエンサーが砕け、薄いバリアジャケットに鈍い音と共にグラーフアイゼンが当たった。

「おりゃあああああつ！」

《シユラツグ・デス・コメーテン》

打撃と同時に、片側が推進器、片側がハンマーへと変化した、コメーテン・フォルムへと姿を変えた、グラーフアイゼン。打撃と同時に強力な推進力でそれを手にするヴィータと共に打撃部位にフェイトを乗せたまま、飛ぶ。フェイトごとビルや電柱を貫き、やがて一回転すると、ヴィータは叫ぶと共にグラーフアイゼンを振るった。

「砕けろおおおつ！」

ハンマーを振り下ろした勢いで、乗っていたフェイトが地面に叩きつけられ、蹴鞠のように弾んだ後で、ゴロゴロと転がり、後ろにあつた噴水に落ちた。それを見下ろしながら、その側に降り立つと、闇の書をその手に召喚する。

「……ツーク……」

「そんだけやられてまだ動けんのかよ。まあいい。大人しくしとけ」
そう言つて、フェイトの魔力蒐集をしようと闇の書を開いた。

後ろではザフィーラと戦うアルフが、フェイトの姿を見て、怒りの声を上げている。だが、攻撃がこちらに及ぶことはないだろう、ということヴィータは確信していた。対峙しているのが、盾の守護獣だからだ。彼はどのような状況においても仲間や主人を守る男だと信頼しているからだ。

「気の毒だけど……闇の書、蒐しー」

『樹』
ウッド

可愛らしい声が聞こえた。それに疑問を持った瞬間、突如現れた無数の鳶に自分が捕らわれていた。突然のことに驚いていると、声が聞こえた。

「どうしてこんな酷いことが出来るの……」

目の前に現れたのは、桜色のドレスを身に纏ったヴィータよりも何個か上の少女。

その目には涙を浮かべている。

「こんなことして……一帯何になるっていうの……」

その言葉にヴィータの理性がプツリと切れた。その言葉は……その言葉だけは、絶対に口にしたくも、して欲しくもない言葉だからだ。「……てめえに何がわかるってんだ……てめえに……てめえに何がワカルンダヨオオオオオオッ!!」

《ギガントフォルム!》

拘束を引きちぎり、巨人さえも潰せそうな巨大な鉄槌へと変化したグラーフアイゼンを目の前の少女目掛けて降り降ろした。だが、その一撃は少女の目の前で容易く受け止められた。翼と星の意匠があらわれた盾によって。

「わからないよ。何も話さないで、ただ暴力を振るうだけじゃ!」

少女の声と共にぶつかっていたグラーフアイゼンが弾き返された。それによって、体勢を崩すヴィータ。同時に少女の眼を見て、ギリツと奥歯を噛み締めた。何故なら、その少女の眼は、自分が愛してやまない、あの少女と同じ、澄んだ輝きをしていたためだ。

「あなたを止める!そして、どうしてそうなったか、話しを聞かせて貰うから!」

そう言って杖を構えた少女。その目は夜空を彩る星のように澄んだ輝きしていた。

ククロウの末裔と鉄槌の騎士

ヴィータの前に降り立ったさくらは星の杖を両手で握りしめた。対するヴィータはグラーフアイゼンを通常形態に戻す。

互いに臨戦態勢を取った。

コール無しで発動可能なカードの数は二枚のみ。最大発動数である5枚はコールしなければ発動出来ない。

(単純な魔法の発動する速さじゃ、勝てない……)

魔導師相手に速さで勝てるなんて愚かな考えは彼女にはない。想也との訓練で百も十も二百も承知だったからだ。

そんなことを考えていると、ヴィータが攻撃に移った。

「お前の魔力も頂いてく！アイゼン！」

《シユワルベフリーゲン・クレイモア！》

打ち出された鉄球は超音速でさくらに向かって飛んでゆく。それと同時にさくらは、『跳』を発動させ、水平に大きく飛び、地面を滑りながら着地する。その直後、今まで彼女のいた場所は鉄球が着弾すると同時に爆発し、燃烧する。避けて正解だった、と思い、安堵すると同時に決意を決めると、さくらは杖を前に向ける。すると、無数の矢がさくらの周りに現れる。

「いっけーっ！」

発動させたのは『矢』のカード。能力は見てわかるように、無数の矢を撃ち出すことだ。撃ち出された魔法の矢にヴィータは驚き、ながらも、障壁を展開。それを体の周りに張り巡らせることで、矢の攻撃から身を守る。

「ツ！サンダーツ！」

声と共に緑色の光がヴィータ目掛けて空から落ちてきた。発動させたのは『雷』それがヴィータを障壁の上から痺れさせた。ヴィータが痛みで顔を顰めるが、即座に鉄球を取り出し、空中に並べると、それらを叩し、打ち出した。誘導弾となったそれは、不規則な弾道を描きながら、さくらへ襲いかかる。流石に地上で避け続けるのは無理がある。さくらは、『翔』を発動させ、空中へ飛び上がる。

翼をはためかせ、羽根を舞い散らせながら、鉄球の攻撃を避けていく。しかし、ここまで直接的な『戦闘』というものを経験したことが無いさくらは、この鉄球を避けるのが精一杯だったため、あることを失念していた。それは――

「フランメー・シユラアアアアックツ！」

そう、当然のことながら、術者のことだ。気づいた時には既に遅く、もう獲物を振りかぶり、今にも襲いかからんとする彼女の姿が視界の端に映った。だが、そのグラーファイゼンの柄を地上から飛んできた何か、その柄をなぞるように巻き込み、ヴィータごと吹き飛ばした。飛び散る火花と、その下で、弾き飛ばされるヴィータ。

「無事か？ さくら」

さくらを片手で抱きとめながら、もう片方の手で剣を構える一人の少年。その面立ちの整った顔は、静かに目の前の敵を睨んでいる。

抱きとめられたさくらは、まさかの状態にその顔を真っ赤に染め、慌てふためいている。そんな彼女に呆れながらも、彼は優しく声をかけた。

「選手交代だ……さくら。お前は下に行つてあの娘を頼む」

耳元でそう囁くと、顔を朱に染めながら、無言で頷き、フラフラと地上へ飛んでいくさくら。それを尻目に、少年―小狼は剣を両手で構えた。

「じきに彼奴の使い魔が結界を維持してる奴の居場所を突き止める。大人しく、して欲しいんだが……」

「うつせえ！ チビガキ！ あたしらの邪魔、すんじゃねえ！」

「……なら、仕方ないな……纏え、火神」

そう呆れたように言葉を零した瞬間、彼の握る剣の刀身に炎が吹き出し、逆巻いた。

「覚悟しろ……俺は彼奴ほど甘くは無い……ッ！」

その言葉と共に幾度目の斬り合いが始まった……。

「……みんな、状況は厳しいみたいね……」

ビルの屋上で、一人の女性が空中投影ディスプレイに映し出された映像を見ながら、そう呟いた。それらのディスプレイにはこの世のものとは思えない闘いの様子が映し出されていた。

「…………この激戦だと、静観してるあの娘と介抱されてるあの娘から取るしかなさそうね…………」

そう決めると、女性はペンダントを取り出し、それを輪にし、空中に浮かべた。その輪の中は異空間になっているのか、本来映るはずの目の前の景色は映っておらず、変わりに緑色の光が見えていた。

「座標認識…………固定化開始…………空間接続…………」

そう呟きながら、ペンダントが創り出した空間に手を入れる彼女。だが、その瞬間、彼女の足元に氷の矢が刺さった。

「!？」

「…………お前がこの結界の中で闘う者たちの参謀のようだな」

現れたのは全身が白の男。白銀の髪に白装束。さらに見える素肌は白い。極め付けに背中から生えているのは純白の白い翼。その翼と彼が纏う雰囲気、人間でないことを如実に表していた。

「ここで引けば、手出しはしない。だが、退かぬというのであれば…………」

その手に氷の細剣を創り出し、それを手にして構えた。

「倒すように言われているのでな」

女性は悔しそうな表情を浮かべ、歯を噛み締めた。確かに状況的には無理をしないほうがいいのであろう。だが、ここで退けば、後に支障を来す恐れがあった。

（どうすればいいのかしら…………状況はこちらが不利…………でも、これを逃せば…………）

（今は引きなさないな。シャマル。焦っては、いい孝も思い浮かばないわよう…………）

（ジャーマン偽名!?!…………わかったわ。ここは一旦、引くわ!）

（いい判断よ。私が閃光弾を撃つわ。あなたは適当に指示を出して。それに合わせるから）

（ええ！わかったわ）

その言葉に頷き、シヤマルは念話を切った。そして、目の前にいる男に撤退する旨を伝える。男は冷静な声で、そうか、と呟くと翼をはためかせ、去っていった。

(ふう……とにかくどうにかかなりそうね……)

そう考えると、シヤマルは撤退するように、全員に指示を出し始めた。

「紫電一閃！」

「フラッシュエッジ！」

炎と光。その二つがぶつかり、火花と光を散らす。最早数えるのも億劫になるほど、この2人は斬り結び、交差し、唾を競り合った。その証拠にシグナムは自慢の甲冑と純白の泡肌に切り傷を作り、少年はその無骨な甲冑と兜を所々斬り落とされ、額には血が乾いた後があった。

「でええええりやあああつ！」

「ハアアアッ！」

片手の上風と両手の幹竹割りがぶつかる。互いの太刀筋がぶつかり、その衝撃でさらに傷が増える。だが、不思議と痛みは感じない。

「おつかしいなあ……」

「なにがだ？」

「こんなに真っ直ぐな剣をしてるのに……こんなに意思の籠った太刀筋をしてるのに、貴女の心は何処か曇ってるみたい」

「……当たり前だ。私は主の為に泥を嚼り、荊の道を進むと決めた。そのためなら、騎士としての誇りも捨てる」

「……そっか。なるほどね。そーいうことか……なら、管理局として、そいつは見過ごせないねえ」

「ならば、我らを捕まえるか？」

「いや……事情によるさ」

少年の言葉に違和感を覚えると、少年はレバンティン宛にメッセージを送信してきた。

「P. M. Cのダイレクトコードだ。管理局はこの手の奴を嫌う。訳ありなら話を聞く。強制はしないよ」

少年の突飛な行動に虚を突かれるシグナム。当の少年は既に武器をしまい、闘う意思は無いようだった。それを見て、シグナムは一瞬、戸惑ったが、レバンティンを納刀し、少年に念話を送った。

（礼は言わんぞ。いずれ、お前の魔力も戴く）

（おう。勝手に取りに來い。そんなときは寄付でもなんでもしてやるさ）

少年の管理局にあるまじき発言にズッコケながらも、シグナムは迷った挙句名乗ることにした。

（ヴォルケンリッターが将、シグナム。貴様の名は？）

（立花想也だ）

（そうか。立花か。覚えておこう）

そう言つて念話を切ると、結界の最頂部から、全体を見渡す。三角形に展開された結界のそれぞれの隅付近で戦いが行われているようだった。

（みんな、聞こえる？）

念話の主はヴォルケンリッター、バックアップの要『湖の騎士』シヤマルだった。

（どうしたシヤマル）

（偽名が、閃光弾を放つから、その隙に離脱しろとのことよ）

（だろ。状況は戦力的に見てもこちらが不利。一度体制を立て直すのが先決だな）

（そうね。シグナム、そつちはー）

（……逃げられてしまった。相手のほうが速かったようだ）

（そう。わかったわ。なら、転移魔法で即座に離脱して）

（わかった）

シヤマルの指示に従い、転送の準備をするシグナム。最後にもう一度、先程の少年がいる方向を見たあとで、呪文を唱え、消えていった。

炎の剣とハンマーがぶつかり合う。かたや技量特化の扱いにくい両手持ちの剣。かたや一撃必殺の打撃兵装。打ち合えばどちらが壊れるかなど、明白なのだが、ヴィータと対峙するこの少年はそれを無視し、圧倒的な技巧で20分以上、打ち合っても刃毀れや折れることなく闘っている。

(こいつ……！打ち合う時に流してやがる！)

「ハアアアアッ！」

ハンマーを弾き、体制を崩したヴィータ。そこへすかさず、小狼は空いたヴィータの懐に飛び込み、発勁を叩き込んだ。勢いよく後方に吹っ飛ぶヴィータ。小狼は追撃をかける為に、刀身に手を添えた。

「水龍招来！」

その呪文と共にどこからとも無く、大量の水が集まり、巨大な龍を形作った。それは大きくうねりながら、近づき、その大きな顎でヴィータを飲み込んだ。

「ガボツゴボツ！」

突然大量の水に呑み込まれてしまい、おぼれそうになったヴィータだったが、どうか体制を立て直し、水の中から飛び出した。

「はぁ……はぁ……」

息も絶え絶えと言ったふうに、荒い息をしながら、力なく片手で握っていたグラーファイゼンを握りしめた。遥か前にいる小狼は今度は剣を天に向けて突き出して、攻撃を放とうとしているのが見取れた。

(これ以上はまずい……どうすりゃ……！)

(ヴィータ、閃光弾を放つはその間に転送を！)

(偽名！ッ！わかった！)

送られた念話に即座に反応し、ヴィータは高速飛行魔法を発動し、結界の最上部へ目もくれず逃げる。

「！待て！」

それを追いかける小狼。ヴィータはシュワンベフリーゲンで足止めをすると、再び空を目指した。

小狼はその弾丸を避けるのが精一杯で、まともに追えなくなってしまう。すると、突然、結界の空一杯に光が現れた。

「なんだ……？」

疑問に思った瞬間、その光は勢いよく爆ぜ、強烈な光へと変わった。その隙にヴィータは転移魔法で、消えてしまう。

小狼はその光の眩しさで、思わず目を瞑ってしまった。そして、光が収まった時には、結界も闘っていた少女達も消えていた。

「終わったか……」

デバイスを待機状態の蜻蛉玉に変えた想也は戦闘具足を解除し、ゆつくりと地上に降り立った。空は先程の薄ぼんやりとした結界と違い、冬特有の澄んだ星空が広がっている。

「ふう……大丈夫かい？」

「はい！お陰様で……危ないところを助けて頂いてありがとうございます」

「気にすんな。アルバイトといえど、局員の端くれ。元民間協力者を助けるのは当たり前だよ」

なのはとそう言葉を交わすと、ニッコリ笑ってサムズアップをする想也。なのはも大きく頷いた。

「さて……聞きたいことや話したいことはあるとは思いますが……まずは合流しねえとな」

そう言うと、想也は転送魔法を発動させようと、魔法陣を展開した。「え……？」

なのはの小さな呟きが転送ゲートを開こうとした想也の耳に聞こえて来た。何事かと気になり、後ろを振り向けば、そこには信じられない光景が広がっていた

彼女の体の中心。ちょうど心臓に当たる位置から、手が突き出ているのだ。その手が握るのは、桜色の小さな光の塊。それがどんなものか、魔導師として活躍してきた想也には嫌になるくらいわかってい

た。

「ツ！んのやろオーっ！」

想也は躊躇うことなくデバイスを戦闘形態に変化させるも、なのは……では無く、レイジングハートに指示を出す。

「レイジングハート！魔力流出カット！なのはの視界を塞いどけ！」

《了解しました！》

「あ……あああっ！」

言い表せない恐怖によって、なのはの顔は青白いを通り越して、真っ白になっていた。そんな彼女の視界を桜色の光が覆った。

「泥棒したなら……この腕ごと叩っ斬る！」

気合と共に振り下ろされた弓刀型のデバイス―エクスシア。それがなのはの体から飛び出した腕の手首を斬り裂いた。ゴトツと切り落とされた手が地面に落ちた。同時に、腕の方からは血が流れ出る。それは、なのはの衣服を徐々に赤に染めてゆく。

手を斬り落とされたことにより、腕は引っ込んで行った。それにより、リンカーコアもなのはの中に戻ってゆく。

「レイジングハート……なのはの意識を強制カット」

《わかりました。そのように》

その言葉の後で電源が切れたかのように、地面に倒れこむなのは。それを想也は受け止め、抱き抱える。すると、一人の青年が空から舞い降りて、想也の前に立った。

「無事なようだな……その娘は」

月ユエが心配そうな面持ちで問いかけてきた。

「ああ。月。この娘はちよつといろいろあつてな。休ませてやりたいんだが……」

「私は主の元へ戻る。お前は？」

「すぐ行く。……いや、この子を頼む」

「？お前は？」

「……ちよつと報告することができた」

想也の神妙な面持ちに何かを感じ取ったのか、月と言われた少年はゆっくり頷くと、なのはを抱え、空へ飛び立った。

敗北の乙女

フェイトは全身に走る痛みで目を覚ましたと同時に何故、こうなったのかについて、考察する。

(……ああ、あの娘に負けちゃったんだ)

暫く考えてから、その答えに至ったフェイトは、同時にもう一人の少女のことについても思い出した。アレは意識を失う前、純白の羽を纏った少女が空から舞い降りて来たような気がしたのだ。

「もしかして……ここは天国？」

「……だとしたら、なんとアットホームな天国だろうな」

天使が自分を天国に連れて行ったと思っていたフェイトはそう呟いたのだが、それに対して不機嫌そうな声で誰かがツツコミを入れてきた。そのことに驚き、一瞬で覚醒するフェイト。掛け布団の端を掴み、そーっと声のした方を除くと、壁に寄りかかり、腕組みして立つ少年の姿が目に入った。フェイトは恐る恐る質問を試してみた。

「あの……ここはどこですか？それで、何で私はー」

「ここはあいつの家だ。それでお前は、ボロボロに傷ついていたから、怪我を治療して、ここで寝かせてた」

「そうなんですか……ありがとうございます」

「礼は俺じゃなく、あいつに言え」

そう言って少年はぶっきらぼうに入り口を指差した。そこには、エプロンを付けた、フェイトよりも少し歳上の少女がお盆を持って立っていた。

「あー良かった！気がついたんだね！」

フェイトが意識を取り戻したことに安堵したのか、少女の顔が綻んだ。

「私、木之本桜！貴女の名前は？」

「フェイト・テストアロッサです……その、助けて頂いてありがとうございます……」

互いに名乗った後で、フェイトはお礼を述べた。さくらは、ううん、と言ってニツコリ笑った。

「魔法使いどうし、助け合わなくちゃ……ね？」

フェイトは小さな声で頷いた。その直後、ぐぐとお腹が鳴った。そのことに驚き、恥ずかしくなったフェイトは、布団に顔を埋めた。さくらはベッドのサイドテーブルにお盆を置くと、フェイトを呼んだ。

「フェイトちゃん、お粥作ってきたんだけど……食べー」

「食べますっ！食べさせて頂きます！」

『閃光の戦斧バルディッシュ』を扱うに相応しい速さでフェイトは身体を起こした。その目は獲物を見つけた鷹のように鋭く輝いていた。身体の痛みは何処行つた、とツツコミを入れたように小狼が難しい表情をして頭を掻きながら、フェイトを見つめる。それを見て、フェイトは顔を紅くしながら、さくらから、渡された茶碗を手に取り、うとするが、自分の手が怪我で動かせないことに気づき、オロオロする。すると、さくらがその茶碗を手に取り、レンゲで中のお粥を少し掬い、ふーふーと覚ました後で、フェイトの口元に持って来た。

「フェイトちゃん、あーん」

「ふえ!?あ……ありがとうございます」

びっくりしながらも、フェイトはそのお粥を口に含んだ。その味は少し酸っぱく、優しい甘さがあった。

木之本家のリビング。そこで、さくらの使い魔であるケルベロス は、同じさくらの使い魔である月ユエと共に、フェイトのデバイスである、バルディッシュと会話をしていた。

「ほー、デバイス言ゅーんも色々種類があんねんなー」

《ええそうです。ミスターケルベロス。大まかに分けて、処理速度特化のストレージ、連携による魔法術式の多様性ではインテリジェント。個人特性に合わせて振り分けられています》

「……なら、あの騎士のような者たちが使っていたデバイスはどちらだ？」

《『こちら』の型枠に当てはめるのであれば、ストレージのほうでしょう》

「『こちら』？何かもう一つあるのか？」

バルディッシュの言い方に引っかけかかりを覚えた月がそう訊ねると、バルディッシュは、はい、と返事をしたあとで、そのことについて説明した。

《魔法術式は『こちら』での主流は主にミッドチルダ式と呼ばれる万能タイプですが、大昔は二つに分かれていました》

「ほんなら、それが、あのハンマーもった嬢ちゃんやら、剣士の姉ちゃんが使った魔法なんやな？」

《はい。その通りです。名をベルカ式。対人戦特化の物理魔法です》
「ベルカ式か……そう言えば昔、クロウが言ってたな……、野蛮な魔法だ、と」

その言葉でケルベロスはある、そないなことあったなあ〜と呟いた。

「あれは確か、クロウと共に異世界の珍しい食べ物を食べに行った時のことやったなあ〜」

「お前らしいな……食べ物のことになると覚えていたとは……」

「でも、結局食べへんかったんや！思い出しても腹立つわ！」

「落ち着け。ケルベロス。あれは事故だった。いや、まあ……事故と片付けるには、あまりに面倒くさいことだったが……」

《あー……お二方とも、よろしいですか？》

バルディッシュがそれを割って入った。それを聞いて、二人は頭を下げてバルディッシュの言葉を待った。

《ベルカ式はご存知なのですか？》

「いや、名前だけ聞いているだけだ。詳しくは知らん」

「ワイも同じやでー。しっかし、物騒な魔法やさかいなー
………はんむ！んーっ！この飴ちゃんめっちゃうまやなー！」

ケルベロスに呆れながら、月はベルカ式について考察を始めた。

（物理特化か……クロウの造ったカードと主の魔法なら、負けなしだが……）

それは、さくらが実戦を経験していれば、の話だ。正直、さくらが闘った戦闘というのは、クロウ・リードが偶然を装った必然の闘いの上で闘ってきた。ある意味、管理された闘いの上で闘ってきた為、殺

気や人を殺す、といった、負の感情が入り混じった戦場は未経験だ。そのような負の感情が漂った場所で、幼い少女を戦わせるには、生まれて数十、数百の時を生きてきた彼には、どうしても許せなかった。(魔法はあっても、経験が問題か……)

どうするか考えていると、バルディッシュが新たまつた口調で話しかけてきた。

《失礼ですが、貴方方の主……ミス・サクラは実戦経験は？》

「んー？じつふえんといえるほどおのじつふえんは、あいして、おごなっふおらんでえ」

「食べながら話すな……」

《そうですか……それであの少女相手にあれだけ……素晴らしい才能ですな》

「あれで伝わったのか……まあ、一応、クロウ……の知り合いから戦闘について、教授されているからな……それなりには出来るはずだ」

バルディッシュは無言になった後で、しばらくしてから口を開いた。

《お願いがあります……》

その言葉は二人を驚かせるには十分な言葉だった……。

麩菓子

時空管理局の艦船・アースラでは、『第76管理外世界』通称を地球で起こった結界反応と小規模な戦闘反応を感知し、それについて、情報を集めている最中だった。

「ここから一番近い中継ステーションは？」

「第66管理世界にあります。そこは先頃の襲撃次元の際、破壊されたままです！」

「ッ！エイミイツ！、結界の分析は？」

艦長不在の中、スタッフ達に指示を出すのは、クロノ・ハラオウン執務官だった。彼は、的確に情報の一つ一つをスタッフに確認していく。しかし、予想も予測もしていない、管理外世界への襲撃に各スタッフも、大慌てで現地状況を把握しようとしていた。

（中継ステーションが歩いていけば……ッ！）

中継ステーションとは、精密な座標入力面倒さで魔力消費の大きい、長距離転送魔法の面倒くささを防ぐために、各管理世界に設けられた転送中継ステーションの略称である。これがあるおかげで、管理局の武装隊は、艦船よりも武装隊員を早く転送出来るのだが、先日の基地襲撃事件によって、現在のアースラの位置から最も近く、地球へと中継してくれるステーションが破壊されてしまっているため、使用不可になっているのだ。

（なのは……フエイト……）

地球には現在、彼の妹分ともいえる存在の一般人が二人住んでいる。彼女らと襲撃者と戦っている可能性は高い。クロノとしては、執務官の権限を行使して、現場に駆け付けたかったが、指揮官が不在になるのは流石に不味いと判断し、その衝動を抑え、艦長席に座って指示を出していた。

「艦長、直通メッセージが来てます」

「そんな状況じゃないと、突っぱねておいてくれ」

デッキ下部の管制室から通信が入り、それを後回しにしようとするクロノ。だが、すぐにそのクロノに対してメッセージを送ってきた本

人の声がブリツチ全体に響き渡った、

《固いこと言うなよ……クロノ。長い付き合いなんだからさあ》
《ツ！その声は、想也か！》

独特の優しい声色はクロノには懐かしく聞こえた。士官学校時代の同期で、執務官になるまでは共に魔法の腕を磨いた親友だからだ。同時に、妹分の魔法の訓練を考えて貰った人物でもある。

だが、そんな人物といえど、流石に任務中の私語は許せない。

「悪いな。いくら、君といえど、任務中なんだ。プライベートな内容は避けて貰えろー」

「結界消失！反応……消失！」

そんなやりとりをしている間に結界は消滅してしまう。

「逃がさないよおっ！反応追跡！」

「ハイッ！」

エイミイの号令で追跡が始まる。

クロノは想也を無視して、現地へ送ろうとした武装隊に指示を出そうとする。だが、その声を制して、想也がクロノが今一番望んでいることについて述べた。

「武装隊はー」

「クロノ、僕は今しがた、犯人グループと交戦してた」

「なんだって!?!といか、君は地球にいるのか!?!」

「ああ。使用魔法についても粗方、検討はついてる。犯人の構成も……な」

それを聞いてクロノは彼が連絡してきた理由を理解すると同時に、彼の要求も理解できた。

（僕にそつちに降りてこい……ということか……なるほど……）

「想也、詳しい話は現地で聞きたい。今から其方に向かう。指定はあるか？」

「言わんでもわかったか。ああ。この家に来てくれ。そこで詳しい話をしよう」

クロノはそれを聞いて頷くと、通信を切り、武装隊に指示を出した。

「武装隊は第2種戦闘配備。追跡班はいつでも出れるようにしておいてくれ。エイミィ、臨時の指揮を頼む」

「オツケー！クロノ君！任せて！」

艦長席からそう指示を出せば、打てば響くように、エイミィの元気な声が聞こえてきた。顔はこちらを向かず、サムズアップのみを見せてくる。

「僕は現地に降りて、囑託魔導師に確認を取ってくる。何かあれば連絡してくれ」

「わかりました」

そう言い残すと、クロノは長距離転送を行った。その姿は一瞬にして、消えてしまった。

底一面が水面となり、そこに生える無数の水仙。それ以外は、何もない漆黒の空間。そこに一人の少女が迷い込んでいた。純白のドレスを身にまとい、トレードヘアのツーサイドアップでは無く、髪を下ろした状態の高町なのはだった。

「……は……」

唯一光るように咲く水仙を頼りに、水の上を歩くのは。すると、自分以外にもう一人人間がいることに気づいた。近づいてみると、少女だった。その少女は三つ編みにした髪を頭の後ろで二つにくくり、団子にしていた。

「……あれ？貴女は誰？」

「あ、えつと、私、高町なのはって言うの！聖祥大学付属小学校の四年生です！」

そう名乗ると、少女は優しく微笑んで名乗った。

「私は日ノ月空。陰陽師をやってるの」

「陰陽師……？」

聞き及んだことのない職業になのはが首を傾げると、少女は苦笑しながら、その仕事内容を教えた。

「悪霊とかを除霊したり、お清めをしたり……祈禱したり。神主さん

とかと同じかな」

「そうなんですか……と……ところで……」

なのはが最もたる疑問を投げかけると、少女は悲しげな笑みでこの空間について説明した。

「ここは……そうね、異世界、精神世界、別次元……解釈する人の自由な判断によつて、有り様や見えるものが変わって見える、そんな場所よ」

「？見える世界が違う……？私には水の上に降り立ってて、その下にはお花が咲いてるように見えるんですけど……」

目に映る光景を説明すると、少女は薄く笑って、なのはの頭を撫でた。

「そう……私にはここが、曼珠沙華でいっぱいに見えるのよ。笑っちゃうけどね」

そう言つて、可笑しそうに目を細めて笑うと、少女は一枚の手紙をなのはに渡した。

「これを……あなたが目を覚まして、一番目に見た人に渡して」

「え……？でも、ここは夢の中……」

「大丈夫。この手紙は特別製なの。それじゃ」

そう言い残して消える少女。なのはは、待つて！、と声をかけ、その手を伸ばすが、そこで夢は途切れた。

ハッと目を覚ますと目の前には白い天井が広がっていた。

「知らない天井なの……」

なのはは、布団から起き上がり、服装を確認する。服装はバリアジャケットを着る前の服装そのままだった。

（あれ？えつと……私は確か……）

記憶を辿り、自分がここに寝ていた理由を模索するなのは。だが、少年に助けられてからの記憶が消えてしまったかのように途切れており、それ以降は何も思い出せない。

（んー……わからない。どうしたらいいの……）

自分が寝ている場所もわからないため、安易に動くわけにもいかず、途方に暮れていると、突然、目の前の部屋の入り口のドアが開い

た。

「起きたみたいだね。具合はどう？」

水盆をトイレに乗せたものを持った少年がドアを開けながらやって来た。

「専門家の見立てではない、医者 of 真似事する、僕の見立てだと、リンカーコアが通常時よりも収縮してるのと、身体の一部に打撲があるから、暫くは魔法の使用が禁止なのと、無理な空戦、陸戦は禁物かな？」

そう言うと、なのはの横に来た少年は、なのはにカップを渡した。

「飲むといいよ。ハニーミルクティー。暖まるし、落ち着くよ」

「ありがとうございます。頂きます！」

なのはは躊躇わず、それを受け取ると、自分の手には少し大きいカップに口をつけ、ハニーミルクティーを啜った。仄かなハチミツの香りとミルクティーの優しい甘みが口に広がった。

「君が高町なのはちゃん、かな？」

「はい……あなたは……？」

「僕は立花想也。よろしくね」

そう名乗ると、想也はなのはの隣に椅子を持ってきて座った。なのはは、彼に何故、自分がここで寝ているのかを訊ねると、彼は頷いてから、経緯を説明した。

その経緯を聞いて、なのはは、自分の胸に手を当てる。それは、魔力を奪われなくて良かったこと、自分が今ここにいることの両方の事実に安堵したからだ。

「管理局には連絡しておいた。後すこししたら来るはずさ」

「管理局の方とお知り合いなんですか？」

「知り合いと言うか……これでも管理局に所属しているんだ。……囁

託魔導師だけでも」

そう恥ずかしそうに頭を掻き、笑いながらそういう彼を見て、なのはは親近感を覚えた。その時、想也が突然顔を上げた。何かに気づいたようだった。

「来たみたいだな……出迎えるとしますか……」

ゆっくり立ち上がると、何事か理解できないなのはを置いて、想也

は部屋を出て行った。

街頭と外灯に照らされた住宅地の中に、突如としてミッドチルダ式の魔法陣が現れた。その中心に現れたのは、ユーノス・クライアとクロノ・ハラオウンの二人だ。彼らは長距離転送を交互に繰り返し、漸くここに辿り着いたのだ。

「はあっ……………はあ……………本局からここまで、本来のルートよりも遠い、連続長距離転送用のルートを通って来たが……………中々、疲れるな」

「そりやそうだよ……………本来は、5人から7人体制で行うのを僕ら2人だけでやってきたんだから……………嫌でも魔力はギリギリになるって」

彼らが疲れている理由はユーノが述べた通りだ。長距離転送は元来、緊急用に考えられた転送方法だ。故に、魔力消費を度外視した術式が組み込まれている。そして、それは上で述べたように、小隊のよくな人数で行うことを前提とした上で使うようになっていた。それ故に2人だけで長距離転送は魔力に自信のある二人だからこそ出来たのだ。

「さて……………彼女たちはどこに……………」

そうつぶやいて、ドアを開けようよすると、突然、目の前の家のドアが開いた。そこから顔を覗かせたのは、1人の少年。それを見て、クロノは懐かしむように笑みを浮かべた。

「やあ、久しぶりだな。想也。元気そうだなによりだ」

顔を覗かせた少年にその声をかけると、少年は家から外に出て、クロノの元に歩み寄った。

「ああ。久しぶりクロノ。相変わらず、背は小さいんだね」

「嫌いぞ。そう言う君は、また身長が伸びたみたいだな。羨ましい限りだ」

お互いにそう罵り合うと、握手を交わした。数年ぶりに直接会った友人同士、罵り合いで旧交を温めると、真面目な表情に戻る。

「中にいるのは、協力者3名と囑託魔導師1人。内2名は今現在、簡易的な怪我の治療を済ませて、ベッドに寝かせてる。意識も回復してる

し、話しもしつかり出来るから、何の問題も無い……とは思うけど」「そうか。わかった。詳しい話は聞けそうか？」

「ああ。それなら大丈夫。ここは僕の家じゃないけど、入りなよ」「その発言はどうなんだ……？」

クロノはツツコミを入れながら、家の中に上がった。玄関はミッドチルダにある平均的な住宅と変わらないことに、多少驚きながらも、靴を履いたまま、上がろうとする。

「待って！クロノ！」

ユーノが彼の肩を掴んで、それを引き留めた。クロノは少し驚いた表情で、疑問を口にした。

「どうした？フェレット擬き。何か驚いたことでもー」

「このまま、お前が恥をかいてもいいなら、存分に僕を使い魔扱いしろよ」

指を指した方向を見ると、そこには綺麗に揃えられた靴が玄関に並べられていた。それに気づいたクロノは顔を紅くしながら、靴を脱いで、それを揃えた。

リビングに着くと、そこには治癒魔法をかけられながら座る、なのはとフェイト、その横で必死の形相で治癒魔法をかける想也。その横で並んで座る二人の見知らぬ少年少女が二人。その隣では空飛ぶぬいぐるみと翼の生えた人間……翼人が立っていた。

「想也、君は相変わらず、色んな人を巻き込むようだが……まあいい。今回ばかりは感謝する」

「……お、おう……」

「ユーノ、彼奴はそろそろ限界だ。話せなくなると困るから、治癒魔法を変わってやってくれ」

ユーノにそう指示を出すと、彼は頷き、想也と術式の引き継ぎを行った。

想也がクロノの隣に座ったところで、クロノは話を切り出した。

「時空管理局執務官のクロノ・ハラオウンだ。今回起きた、魔導師襲撃事件の担当者でもある」

にこやかにそう言って、どこからか取り出した麩菓子齧る想也。その後で残りの2人を纏めて紹介する。その際、纏めて紹介されて不服を申し立てたぬいぐるみことケルベロスだったが、麩菓子をその口に突っ込まれ、鎮圧された。

「んで、事件の経緯についてだけど……なのはちゃんのほうが知ってるから……なのはちゃん、話してくれるかい？」

「はい……それじゃ……」

なのはははつきりした声で、話し始めた。ほの内容一つ一つをS2Uに記録していった。その途中、フェイトも話を交えながら。クロノはその激戦の様相を聞いて、ため息をついた。それは呆れでは無く、よく無事に帰ってこれた、という安堵からのため息だ。

「ふう……全く……相手が殺しに来ていたら死んでいただろうに……それを差し引いても、想也とその少年達が助けてくれたから、治療魔法で治る程度で済んだんだ。これからは、真つ向勝負では無く、逃げの闘いを覚えて貰いたいものだが……」

「ごめんなさい……クロノくん」

「ごめん。クロノ。なのはが危ないってわかったら、いてもたってもいられなくて……」

クロノが2人に対して怒ると、彼女らはしゅんと、小さくなって、謝った。それを見て、まったく、といってため息をつく。その表情は優しい表情をしていた。

「助けてくれたのは感謝する。事件解決後に協力者の二人には謝礼金を渡せるように申請しておく。それから、なのはには、治療に掛かるはずだったお金と、謝礼金を纏めて渡せるようにする」

そう言って、デイスプレイに3人に渡そうとくる金額を見せるクロノ。それを見て、3人は目を丸くし、受け取りを拒否した。

「え?! 私達は何も……」

「そうだ。特にこれといって何も出来たわけじゃない。だから、これだけのお金を貰うわけには……な」

「そうだよ! 前みたいには流石に……」

そう言う三人だったが、クロノは首を横に振った。その理由を想也

が話す」

「これには、お礼の意味ともう一つ理由がある。『管理局の仕事に関係ない奴が首を突っ込むな』……っていう、大人の黒い暗黙の了解ってやつだね。ま、僕としては、関わってほしいけどさ。」

「どういうことだ？とクロノがポカーンと口を開けて、首をかしげる。想也は諭すように話し始めた。

「いいかい？クロノ。確かに彼女らは被害者だ。でも、恐らく自分達の襲われた理由を知りたいはずだ。……なのはちゃんの場合は、無理やりでも関わろうと思うだろうね。いい意味でも悪い意味でも真っ直ぐだから」

それを聞いてなのは顔を紅くして俯く。それを気にせず、想也は話を続ける。

「そして、こいつら……少年少女ラブラブコンビはだ……否が応でも関わることになると思う」

「どうしてそう言い切れるんだ？」

「ん……？感だよ、感」

さも当然といった風に、自信を持ってそう言う想也。クロノとユノ、小狼、なのは、フェイト、月がずっこける。そんな中、さくらはふふつ、と笑って想也の言葉の後に話した。

『『この世に偶然は無い。あるのは必然のみ』……だよね？』

「ああ。そうさ。それに、人手は多いほうがいいだろ？クロノ・ハラオウン執務官？」

「それは……そうだが……」

「実力は買うよ。特に、少年少女ラブラブコンビは」

期待の籠った目で想也が2人を見た。それを見てクロノは、なるほど、と納得したような、呆れたように頷くと、わかった、と言って、言葉が続けた。

「お前がそこまで言うなら……民間協力者として協力を要請する。手続きに一週間ほど時間が掛かる。想也、その一週間以内に、一度そのフェレットもどー」

「クローローノ？麩菓子食わされたいか？」

「ごほん……すまん。ユーノと、なのは、フェイト、それから2人をつれて、本局に来てくれ。よろしく頼む」

そう言うと、クロノは立ち上がった。と同時に、そうだ、と言って、なのはとフェイトに手を差し出した。

「君達のデバイスを一度、オーバーホールしておきたい。渡してくれと助かるんだが……」

「あ、それなら……はい」

「クロノ、2人をよろしくね」

レイジングハートとバルディッシュを2人はクロノに渡した。クロノはそれをポケットに入れると、ユーノと共に転送ゲートを開く。

「想也……また会おう」

「おう。またな」

クロノは言いたいことを飲み込んで、挨拶を交わした。想也は笑顔でそれを見送った。

クロノ達の去ったりビングでは、挨拶を交わしていた。そのあとは小狼以外の女子三人が姦しく、話していた。

「そうなのーまだ、魔法使って半年なんだー！さくらちゃんは？」

「うーん……一年くらいかな？」

「えつと……私は、もう、5年くらいかな？」

1人残された小狼は月に対してこう呟いた。

「俺、女の子やっぱり苦手だわ」

と……

歪みの果てに待ち受ける闇

二章 序章

あの戦いから一週間が過ぎた。敗北を味わった2人の少女は手を繋いで、とある家に向かっていた。想也から指定された場所は、彼女達の住まいがある海鳴市の中心部からバスを乗り継いでようやく来れる場所に位置していた。東京タワーが見えるこの街の名前を、生まれてこのかた、海鳴で暮らすのはは、知らないわけがなかった。

「フェイトちゃん、ここが友枝町っていうんだよ」

「ともえだ……ちよう？」

「そう！この街はね、海鳴市の中でもお金持ちがいっぱい集まる場所なんだって！」

友枝町は町という名前こそついてはいるが、その実は、かなり高ランクな家が多い。それもそう。近くには友枝町が、バスを乗り継げば、なのはやフェイトも通うことになった、聖祥大付属小学校にもバスを乗り継げば通えるし、何より、東京や近くの温泉施設や商業施設にも電車一本で行ける。ベッドタウンとしても、余生を楽しむにしてもこの上ない場所なのだ。

閑話休題

暫く地図通りに歩いて行くと、鉄柵で囲われた庭が見えてきた。

「フェイトちゃん見て！お花が綺麗だよ！」

「本当だね。ここ、何かの公園かな？」

「帰りにちよつとだけ寄ってみようか？」

「そうだね。時間があれば寄ってみようか……って……あれ？」

なのはが地図を見て、首を傾げた。何故なら、自分がある場所と目の前の公園のような場所の近くに、目的地を示す、赤い矢印が点滅していたのだ。不思議に思い、フェイトの手を引いて、なのはがその矢印の場所に向かうと……

「で……ここがその場所だけ……ど……ど……」

「え？……ここ待ち合わせなの？」

なのはとフェイトが驚くのも無理は無い。目的地と示された場所にたどり着いて見れば、出迎えたのが身の丈の何倍もある鉄条門で、しかも、帰りに遊びに行ってみようと思っていたのが、目的地なのだから、二重の意味でびっくりだ。

「……これ、どうはいればいいの？」

二人が戸惑っている、突然、門が一人でに開きだした。それを見てなのはは門の周りを見渡す。すると、何かを見つけてニヤリと笑った。

(なるほど。そういうことだったんだ)

豪邸に住む人も大変だなあ、と一人腕を組んで頷いていると、フェイトがなのはに抱きついてきた。

「ふ、フェイトちゃん!?!どうかしたの?」

「なのは!あ、あの城門、勝手に開いたよ!?!大丈夫なの!?!」

「にやははは……平気だと思うよ?っていうか、フェイトちゃん、幽霊とか苦手?」

「幽霊?」

「あ、幽霊わかんないか……えーつと……」

「ドツカーン!」

突然、2人の後ろで奇声が響き渡った。驚いて振り返ると、そこにいたのは、愛すべきバカだった。

「昼間からお暑いね。ここだけ、真夏日かな?」

「もー!想也くん!驚かさないでよー!」

現れた彼に驚いて、フェイトはなのはの後ろに隠れてしまう。その身体の後ろから、顔を覗かせている。想也は軽く笑うと、頭の後ろに手を組んで、外に門から中に入って行ってしまふ。

その後を追いかけるなのは。フェイトもそれに続いた。

中に入ると、その豪邸の庭では、数人の男女がお茶をしていた。それはご存知、木之本桜と李小狼。それ以外に、彼女らの友達である、この家の住人の、大道寺知世だ。

「あーそーやくーん!こっちこっち!」

「いま、お茶を用意させます」

想也に気づき、さくらが手を振り、知世がメイドに指示を出す。当然、彼の後ろにいる、なのはとフェイトの分も含めて。

「うふふ。随分と可愛いお友達ですね。さくらちゃん」

「うん！私と同じ、魔法少女なの！」

さくらにそう紹介され、それを聞いた瞬間、知世は目を輝かせて、2人の近くに駆け寄り、その手を握った。

「お二人とも魔法少女なんですの！ぜひ、変身シーンを見てみたいですよわ！」

「あ、あはは……」

「おいおい。知世ちゃん。ここではこいつらは許可が無いと魔法つかえないの。だから、ワガママ言っちゃだめだよ？」

そう言つて、知世を嗜める想也。知世ははい、と笑いながら頷くと、一歩下がって自己紹介を始めた。

「初めまして。私は、大道寺知世と申しますわ」

「あ、高町なのはです！」

「フェイト・テストアロッサです」

2人も知世に習って、挨拶をした。それを見て、想也は微笑むと、手を叩いて注目を集める。

「さーて、集まったみたいだからな。とつとと用事を済ませちゃおうか」

その言葉にその場にいた全員が一様に頷いた。想也は要件を簡単に説明する。

「まず、これから次元転送で、皆さんを本局まで飛ばします。その後はなのはとフェイトは新デバイスのテスト。小狼、さくら、知世は本局の探検。その後は今回の事件の詳細について、クロノくんから話を聞きます。いいですね？」

「「「はい」」」」

全員が返事をしたことに満足そうに頷くと、彼は全員を円になるように立たせた。そして、さくらを真ん中に来るように呼んだ。さくらは戸惑いながらも、想也の隣に立った。

「よし。そしたら、星の杖を出してみろ」

「杖を？うん。わかった！」

頭の中で杖を呼び出すと、鍵から杖へと姿を替えた。想也はそれを確認すると、杖を構えるように促した。さくらがそれに従うと、想也はさくらに何をして欲しいのか、要件を述べた。

「さくらちゃんには、皆を本局まで飛ばして欲しい」

「え!?私、その場所わからないよ」

さくらが狼狽していると、想也は大丈夫さ、と言って頭を撫でた。

「自然とお前さんなら出来る。何せ、僕がそう信じてるから」

その言葉を聞いて、さくらは不安そうな顔を緊張で強ばらせながら、頷いた。その後、目を瞑る。どうやら集中するようだ。

その様子を尻目に、さくらのいた円の中に想也が入る。すると、知世が問いかけてきた。

「さくらちゃん、大丈夫ですか？あんなに緊張して……」

「大丈夫。撫でた時にあいつの頭の中に正確な場所とイメージを送っておいた。そこに行くための道筋は、あいつほどの魔力なら、自ずと掴めるさ……それに」

「？」

そう言って言葉を区切った想也は優しく笑ってさくらを見た。

「何があろうと、あの娘は自分で困難を乗り越えて行くタイプだから
さ」

そう言うと、想也はにこやかに笑った。

序章2

魔法陣の中心に立ったさくらは手にした星の杖を両手で構える。その頭の中に浮かぶのは、あるはずのない、時空管理局本局の正確な場所と、転送位置の記憶。それは想也から渡された、大切な地図だ。これをずらしてしまえば、ここにいる、彼女を含めた6人は全く見当違いの方向にとび、最悪は次元の海の藻屑になるだろう。そんなことは、さくらは知らない。だが、何となくだが、見当はついていて。その、プレッシャーに押しつぶされないように、彼女は、目を瞑り、その正確な位置目掛けて、自分の魔力を流し込んだ。

「杖よ！我が声に応え、次元の海を渡り、彼の地へ導け！」

その呪文と共に、黄金の風が彼女を中心に魔法陣に入るものたちを包み込んだ。逆巻くように風は空に昇ってゆく。それを不安そうな面持ちで見つめるさくら。そんな彼女に小狼は優しい声色である言葉を告げた。

「大丈夫。絶対大丈夫だ。さくら」

その言葉にさくらは驚きつつも満面の笑みで頷き、杖を振り上げる。そして、皆を送るために勢いよく振り下ろした。その瞬間、眩い光と共に彼らの姿はそこから消えた……。その代わりに、ヒラリと一枚のさくらの花びらが空から、芝生の上に舞い降りた。

そこはどこか不気味な空間。薄暗く、仄かに松明の火がその場所を照らす。その奥に位置する玉座。そこに座る男は、水鏡を眺める、顎鬚を撫でた。その表情は常の無表情のままだが、何かを考えているようにも見える。

「……様、李家分家、桃花と大竜が来ましたわ」

「そうか……通せ」

従者の言葉に重々しく頷くと、従者花一礼して、扉を開けた。そこに立っていたのは、二人の子供。一人は赤い導師服を纏った少女。もう一人は古い中華風の装飾の施された鎧を纏った少年だった。彼ら

は男を前にすると、膝をついて頭を垂れた。

「お久しぶりです。影の魔術師」

「うむ。久方ぶりだな。月が20と4度、空から消えるくらいの時が流れた……」

そう呟くと、不敵な笑みで彼らを見た。その目はどこか楽しそうな声で語る。

「私が生まれて、幾数十。未だに本来の者たちに手を出せぬ。まあ、私が出せないだけで、幾らでもやりようはあるのだがな……」

そう言うと、影の魔術師は部屋の奥にある縦長の水槽を眺めた。そこには1人の少年が浮いていた。満足げに笑うと、彼は配下の黒尽くめの男に目配せをする。男は一礼すると、部屋の奥に消えた。

「さて、貴様ら呼んだのは、他でもない。貴様らの願いを叶えてやろうと思つてな」

その言葉に2人は機敏に反応する。すると、2人の前に先程の男が現れ、二つの錠前を置いていった。

「……これは？」

『魄の核』というものだ。元になっているものは、若いクロウ・リードが、己を鍛える為に作り上げた、魔法具。それを私が強化し、作り上げたものだ」

少年の問いに、黒の魔術師は自身が持つ『魄の核』を手に取り、使い方を教授する。ボタンを押した瞬間、フタが展開。オドロオドロしい光と共に男の姿が黒い騎士甲冑を纏った姿へ変わる。

「これが、この魔法具の力だ。此奴を渡すかわりに、今から言う三つの魔法具を奪ってきて欲しい」

「ハイッ！一命にかえましてもー！」

少年が大声で返事をした。その少年に黒の魔術師は不敵に笑いながら、奪う物を伝えるのだった……

それは、心に小さく刺さったトゲ

黄金の風が管理局の転送ゲートを輝かせた。その光と共に降り立ったのは、さくら達一行だ。その光が止むと、さくらは安堵したように溜息をついた。その横に小狼と知世が心配そうに彼女の肩を支えた。

「大丈夫ですか？さくらちゃん？」

「無事か!?さくら」

「うん……大丈夫……かな？ちよつと使いすぎたかも……」

若干、ふらふらした足取りのさくら。無理もない。並みの魔導師では倒れてもおかしく無い程の転送距離を初めてやってのけたのだから。すると、そんな彼女に高町なのはが、手を握った。もう片方の手をフェイト・テスタロッサが。その行動に三人が首を傾げていると、なのはが朗らかに理由を説明した。

「魔導師はデバイスが無いと、手を握って魔力を回復するんだよ」

「だから、さくらも私達の魔力で回復するかも……ね？」

そう言つて、二人は頷くと、目を瞑る。デバイスが無い為、細かな制御は自分たちで行わないといけない。下手に大きな魔力を流し込めば、さくらの手が壊れてしまう。最悪、二度と使えなくなるだろう。魔力を最も放出しやすく、吸収しやすい掌といえど、その魔力を放出するためのリンカーコアから流れるラインドライブはとても細い。それら一つ一つに魔力を流し込むのは、至難の技。受け渡す方は細心の注意を払わないといけない。

「くっ……!」

「ふっ……!」

「凄いな……」

札による多彩な魔力変換攻撃を得意とする小狼にとって、魔力の精密作業は最も重要だ。事実、彼は魔力制御と精密操作は最も得意としている。そんな彼が、凄いと呟いた。その理由は莫大な魔力を上手く制御しているからだ。なのはの方は、魔力を細くし、持続させており、フェイトの方は魔力を圧縮させ、球体状にして、それぞれ、送ってい

る。この運用方法は自分でも無理だ、と小狼は思った。

そうこうしていると、着いて早々、手続きをしに消えた想也が戻ってきた。手にはチケットを握っている。不思議そうな表情で駆け寄ると、その理由を小狼に訊ねて来た。小狼が答えると、想也は目を丸くして、なのはとフェイトの手を掴んだ。集中していた彼女達は、驚いた様子で彼を見る。そんな彼女達に想也は優しく諭した。

「おいおい。さくらの魔力はお前達の魔力二人足しても、賄えないくらいデカいんだぞ？それに、こいつらの場合は、使う魔力の根幹が違うから、無駄とは言わないけど、少ななあ……」

「え？そうなの!？」

「まあ、死ぬことも、悪くなるわけもない。大丈夫さ。……小狼？」

突然名前を呼ばれ、小狼が首を傾げながら隣にやって来た。

「こいつの手を握ってやってくれ」

「え？それは……」

「まあまあ。精神的な疲れは、精神的な癒しで回復されるもんさ……頑張れよ？少年」

「え？……つておい、ちよつと!？」

引き止めようとしたが、彼はヒラヒラと手を振り、なのはとフェイトとを引き連れ、どっかに行ってしまった。残された3人。小狼は顔を赤くしながら、さくらの手を握った。その様子を知世は、オホホホと笑いながらビデオカメラに撮影している。

「李君とさくらちゃんの貴重なラブシーン！お二人の結婚式で流すために撮りますわー！」

「撮るな！勘弁してくれ！」

「ほえええ……小狼君の手、暖かいよう……」

「さ、さくらさん？声が……声が妙に色っぽいのは止めてくれる？」

「ふふふ。小狼君を籠絡するさくらちゃん、素敵ですわ……!」

なお、知世の持つビデオカメラは想也が撮影用のインテリジェントデバイスとして創り出した、ハイエンド機だ。当然、他のデバイスに動画を送ることも、知世が手を掛けずとも、映像編集、BGM編集もこなしてしまう。想也曰く「知世の為の、さくら撮影用、デバイスだ

から…、TSDでよくね？」と名付けられた。

閑話休題

撮影大会はエイミイが来るまで続けられたとか……。

想也によって連れてこられたそこは、薄暗い研究室のような場所だった。その奥に緑色の髪をした眼鏡をかけた女性がレイジングハート、バルディッシュの浮かぶメンテナンスディスプレイを眺め、最終チェックを行っている、

「ここは、デバイス管理室。管理局のデバイスを治したり、改修したりする場所だよ」

なのはとフェイトは手短にそう説明されて、なるほど、と頷いた。確かに、精密機器がそこら彼処にズラリと並んでいる。

「マリエルの姉さん、どう？この子達は」

「あはは……なんとか、期日までに間に合ったよ……想也くんの提案書に書いてある通りの基礎フレームを組んだからねー。いやー、助かった……」

「これでも、デバイスマイスターの資格は持ってますし、頑丈かつ精密なデバイスは何にも替えられないですから」

「確かにね……。さて、君達が、なのはちゃんとフェイトちゃんかな？」

そう尋ねられ、なのはとフェイトは元気よく返事をする。それを聞いたマリエルは和かに自己紹介をする。

「管理局技術部のマリエル・アテンザです。主にデバイスの整備や改修を担当しています。それで、今回君達のデバイスを担当したんだけど……」

そう言つて、マリエルは2人に紙を渡した。その紙には『デバイス仕様書』とかかかれていた。

「口頭では大まかなことしか話さないから、細々したことについては、その紙を読んでもらえるとわかるよ。それで、君達のデバイスだけ……」

そう言つてマリエルは空間投影ディスプレイに2人のデバイスの

使用書を映した。

【レイジングハート】

起動コード：エクセリオン

使用：中・長距離・弾・砲撃型デバイス

モード：アクセル、バスター、ライザー、エクセリオン

【バルディッシュ】

起動コード：アサルト

使用：全距離対応型・対要塞・攻略デバイス

モード：ハルバード、ハーケン・サイズ、シザース、ザンバー

これを見て、2人は目を丸くする。各モードについては、概ねそのままだったが、そのスペックが改修前よりも高くなっているのだ。そのスペック差は凡そ3倍。レイジングハートに至っては、それ以上とも言える。

「元々、バルディッシュはフェイトちゃんの個人使用限定で作られたワンオフ機で、且つ、最新型のインテリジェントデバイスだからある程度、基礎フレームを改修出来るから、問題は無かったんだけど、レイジングハートは、初期のインテリジェントデバイスだから、新システムを組み込むには無理だったの。それに、歴代の使用者がちゃんとした整備やオーバーホールをしなかった所為で、自己修復でも快復不能なほど、フレーム自体にガタが来てたの。そこで」

「そこまで、話すと、マリエルはディスプレイにレイジングハートを映した。」

「考案段階だったけど、想也くんの考案した新型の追加フレームを組み込んで、完全になのはちゃんが扱えるように造り変えたの」

「え？今まではどうして……」

「えーと、今までのレイジングハートはなのはちゃんの戦闘スタイルに合わせて複数のモードから、最適なものを選んで戦ってたの」「そうだったんですか……それじゃあ新しいレイジングハートはもしかして……」

「砲撃・射撃以外の全部のシステムの消去をして、なのはの個人使用限定で、その戦闘スタイルを元に組み直した各モード。そして、なのは

の今の肉体に負荷をかけない程度の最強装備。それが、お前の新しい相棒だよ」

なのはの言葉を引き継いで、そう話した想也がフェイトとなのはにそれぞれの愛機を託す。それぞれの愛機はネックレスとペンダントの姿こそ変わらないものの、その形は可愛く、かつこよくなっていた。

「わあ……！」

「バルディッシュユ・カッコいい！」

2人が感嘆の眩きを零す。そんな2人にマリエルは、ごめんね、と言つて、2人を再び注目させる。

「新システムについて説明するね？今回、搭載したのは、CVK792……ベルカ式カートリッジシステム」

「ベルカ……確か、あの剣士の女の人が言つてた！」

なのはが思い出したように、ポンと手を叩いた。それにマリエルが領くと、ベルカ式の魔法発動プロセスを説明し始めた。

「魔力を圧縮させた弾丸を炸薬させることで、瞬間的な魔力出力や魔力強化を行うことが出来る魔法だよ。だから、今までよりもスムーズに魔法が使えるけど、当然、術者とデバイスに相当不可がかかる。だから、二人とも、くれぐれも無茶しないように……ね？」

それを聞いて2人はゆっくり領く。

「さて……それじゃあ、アースラに向かうとしますか」

そう言うと思也はなのはとフェイトを伴って、外に出て行った。

残されたマリエルは、はあ、と溜息をつくと、机の上にドサツと倒れた。

「やーっと、溜まってたお仕事が終わったよ……あとは、長期観察のコレのレポートを纏めれば終わりかな……」

そういったマリエルの手に握られていたのは、漆黒の錠前。一切の光も寄せ付けないほど、光沢の無いその錠前には、金色の魔法陣と、月と太陽のレリーフが刻み込まれていた。それは、マリエルの手の中で静かに刻が来ることを待ち望んでいた……。

次元航行艦アースラ。数ある管理局次元航行艦の中で、最も優秀な局員もが集まる、ツワモノ揃いの艦船として有名な艦だ。その艦は現在、長期航行の任務から帰り、本局のセントラル・ドッグに係留され、各部の補修と点検が行われている状態だった。

それを見下ろすようにある、セントラル・ドッグ展望ブロックには、小狼、知世の姿があった。先程のやり取り取りの後で、アースラクルーの一人、エイミィに声を掛けられた三人は、彼女の案内のもと、管理局本局を見学。現在は、この展望ブロックでアースラのことについて、教えて貰った後だった。

「しかし……魔法と聞いて、俺は呪術的なことだったり、不可解な現象ばかりを想像してた……実際、俺もそう言った類の魔法を使ってるしな。だが、高町やテスタロッサの使う魔法……いや、魔導は、なんというか……科学的だな」

小狼は腕を組みながら、誰に語りかけるわけでもなく、独り言ちた。それは、どこか、自分の使う魔法が古臭く感じたからだ。すると、それに対し、知世が仕方ありませんわ、と悲しげに答えた。

「どんな技術も、何れは機械がどうにかしてしまいますわ。李くんの使うお札も魔法を効率良く使おうと試行錯誤した結果でしょうし……元来、人は生活を豊かにしようとして、生み出されたのが科学でその結果の機械ですから……魔法も当然、そうなるのかもしれませんが……」

その言葉に小狼は何も答えず、ただ、渡されたパンフレットを眺める。そこに書いてある標語を見て、薄ら寒くなった。その感情を見せぬように、小狼は常の仏頂面で、階下のアースラを眺める。

「誰もが魔法が使える世界……本当に幸せなんでしょうか？」

「さあ……な」

魔法が使える⇨幸せ

その方程式が罷り通るとは小狼も知世も思っていない。それは、最悪で最高の方程式を身を持って体験してきたからこそ、言えることだ。

強い魔法が使える⇨それだけ、自分の身に降りかかる災厄は大きい

しかし、同時に得るものが大きい

この世界でも、もしかしたら、その方程式が罷り通っているかもしれない。

自分やさくらはまだ幸せだ。何せ、たった一人の男の人掌の上で、魔法を使う意味とその大切さ、そして、人を想う大切さを学べたのだから。

「……俺たちがそれを考えたところで、どうにもならない気がするが……」

「でも、考えることは大切ですわ。考えるのを止めたら、人は止まってしまいますわ」

そう言うのと知世はエイミーに入れてもらったインスタントティーを静かに飲み干した。それは、この湿っぽい話を終わりにする合図のように。それを機敏に察知した小狼はほう、と溜息をついた。

「ふふ。李くんは、女の子の扱いがお上手ですわ。お姉さんがいるからでしょうか？」

からかうように、だが、しつかりと褒める知世。小狼は呆れたように頬を掻きながら、ぶつきらぼうに答えた。

「さ、散々、姉上や苺鈴に特訓させられたからな。この数ヶ月間」

「ふふふ。特訓でどうこうなるわけではありませんわ。元々、李くんがちゃんと人に気遣いと配慮が出来る証拠ですわ」

「だと……いいがな」

小狼はそう言うのと、明後日の方向を向く。それは、さくら関係で何かあることを知世は感じ取った。辺りを見渡し、誰も来ないことを確認すると、その内容を話すように要求する。

小狼は仕方なさそうに、話した。

「いやあ……その……女のお前に話すのもアレなんだが……さくらと未だに……キスが出来なくてな……」

「……その、聞いてしまって申し訳ないですわ」

内容が内容の為、流石の知世も答えられなかった。女性の心、決してやさくらの思考パターンだったり、配慮なら兎も角、こんな込み入った話は流石に予想していなかったのか、面を喰らうと同時に、珍

しく顔を赤くした。

そんな中で、知世はふと、思ったのだ。

(自分はこのまま、二人の間においていいのか……と)

夜蘭、オンスステージ！

本局の数ある会議室の内の一つに、多くの人が集まっていた。その中には、なのはやフェイト、さくら、小狼、知世の姿もある。5人は互いの顔を見ながら、他愛ない話をする。

向かい側の管理局側の席に座る想也は腕組みをして、眠っている。その右隣では、クロノが頭を抱え、想也の神経の凶太さに呆れており、左隣のエイミイは、ディスプレイに凄まじい速さで何かを打ち込みながら、たははー、相変わらずだなー、と想也を見て笑っていた。

「……さて、時間か……」

アースラススタッフが全員集合したことを確認し、クロノがそう言うのと、咳払いをして、立ち上がったクロノが周りを見渡したのを確認し、エイミイが号令をかける。

「これより、本事件の概要についてクロノ執務官より、報告があります」

クロノは壇上に上がるとディスプレイに画面に映像を映し、説明を始める。

「最近、魔導師や大型魔法生物を襲撃し、リンカーコアを蒐集していくという事件が発生した。これに伴い、アースラススタッフ及び、囑託魔導師1人、そして、民間協力者は、この事件を迅速に解決してもらう為、以下のメンバーに分かれてもらう」

ディスプレイには二つの班が表示されていた。

・事件に使われたデバイスの探索及び、過去の事件及び、被害のあった次元世界及び、局員への聞き込み。

・第96管理外世界での現地対応及び、犯人グループの探索と確保を主体とした、現地組

「なお、今回、リミエツタ執務官補佐と僕は現地組の指揮に当たる。情報探索・捜査組はアースラの新装備及び、動けない間は、ユーノ・スクライアと一緒に無限書庫で過去の闇の書事件の情報を精査していただく」

「「はっー」」

「うん。それでは、これより、本日只今をもって、アースラは闇の書事件捜査を開始とする。艦長不在ではあるが、迅速な解決と犯人逮捕に全力を注ぐよう、各人、心してかかるように」

「了解ッー」

クロノの言葉にアースラスタッフが返事をする。その中には勿論、なのはとフェイトの声もある。さくらは、その気迫に気圧され、あやー、と声を上げる。知世はそれを微笑ましげに眺め、小狼は相変わらずの仏頂面で話を聞いていた。

そんなとき、突如、会議室に通信が入った。

「こちら、武装隊！現在、B9地区に結界が張られましたッー」

その言葉にクロノのは涼しげな顔で立ち上がると、想也を見る。想也はクロノの自然の意図に気付いたのか、既に立ち上がり、ウォーミングアップを始めていた。

「わかってるよ。クロノ。なのはとフェイトのデバイスのフルコートが終わるまで、中で時間を稼ぐ！武装隊は？」

「転送ポートから現地へ転送され、現在は、結界破壊に専念しているとのこと。現状維持の指示を出してますー」

想也の問いにアレックスがスラスラと答える。それに対して想也は頷くと、エクシアスをその手に握る。

「想也。あくまで、足止めで構わない。一人でー」

「俺も行くぞ」

「まて！君はみんなかんー」

静かにそう言って想也の隣に降り立つ小狼。それにクロノが苦い表情を浮かべて引き止めようとするが、小狼はそれを無視し、想也に話しかける。

「立花。確認したいことがある。俺も一緒に行くぞ」

「そう……どうぞご随意に」

「あ……私も行くー」

「よし……じゃあ……っー」

突然、ブザーが鳴り響いた。それは、緊急事態を告げる警告音だっ

た。クロノがジエスチャーで現地の映像をサブからメイン画面に切り替える。そこには、鮮血を吹き出して、落ちてゆく武装隊の面々が映っていた。その中心では、狂気的笑みと笑い声をあげて舞い踊る、祭司装束に身を包んだ少女が血に染まった大きな鉄扇を手に、舞い踊っていた。それを見て、小狼の声が震える。

「……桃花（タオファ）……アイツ！」

それは怒りで震えているようだった。想也はそれを見て、冷静にクロノに進言する。

「クロノ、あの血塗れの鉄扇少女は小狼の知り合いみたいだから、小狼が引きつけて……他の騎士はおれとさくらで引き受ける！」

「ああ……構わない！」

「頑張る！」

「頼むぞ……想也」

クロノは了承するように深く頷き、去り際にそう言葉を口にする。想也は背中越しにサムズアップをすると、光の中に消えた。

琥珀色の結界の中で、シグナムは手にした獲物を構える。その表情はいつになく、苦しげな表情を浮かべている。よく見ると、その鎧は所々傷ついております、純白の柔肌には切り傷が付いていた。

その対面では質素な誂えながら、作りの良さが伺える着物を纏った長身の美女が立っていた。一見すると、涼やかな表情を浮かべているが、視線は射貫くようにシグナムを見ている。

「あなたが……闇の書の守護騎士のリーダーね？」

「ええ……そうです」

愛剣レバンティンを諸手で構え、シグナムを淡々と答える。その言葉の裏で、思考を張り巡らせ、現状把握をしている。

（くっ……結界を張り、魔導師を襲撃するつもりが……まさか、逆手に取られて、襲撃されるとは……）

ベルカ式の空間隔絶タイプの結界は、硬さに優れているため、内部及び外部から攻撃しても、並みの攻撃では、破壊が不可能に近い。そ

れ故、魔導師を襲撃する際は、この結界を使い、逃げ道を無くしてから襲撃する。今回も結界内に捕らえ、その上で蒐集を行おうとした。だが、シグナムの待機していたポイントには、先客がいたのだ。それが、今戦っている、女性だった。

(魔力も強いが、これ程までの実力とは……)

ついでと思い、襲いかかったのがそもそも間違いだった。その実力は、シグナムの予想以上で、殆どの攻撃をいなされ、その隙に魔力を纏った団扇で切り裂かれるという、一方的な展開だった。

「訪ねたいことがあります。11年前の闇の書事件の際、貴女方は襲った人物のことを覚えていますか……?」

女性がそう問いかけると、シグナムはふるふると首を振る。その答えに女性は目を伏せながら、そう、とだけ答えると、女性は団扇を帯に挟み、静かに溜息をついた。

「闇の書の防衛プログラム……守護騎士ヴォルケンリッター……11年前にも、剣を交えましたが、その時は誰かの意思に乗っ取って、その背後に感じられたのに、今はそれを感じない。何故でしょうか?」

「11年前?それに、以前とは?」

シグナムが女性の言葉に疑問を感じた瞬間、頭の中に直接声が響き渡る。

《シグナム!ボサツとしてんじゃねえっ!》

その念話と共にヴィータが空中へ現れる。その手に握られた鉄槌が浮かぶ鉄球を勢いよく打ち出した。

「燃えて消えちまえっ!」

爆発と同時に女性の周囲が燃焼する。その大火力の攻撃に流石に女性もやられてしまった、もしくは、反撃不可能な怪我を負わせたと思っただろう。シグナムは、レバンティンを納刀し、ヴィータはグラーフアイゼンを肩に担いだ。

「珍しいじゃねーか。おまえが、ぼーっとしてるなんて。なんかあったのか?」

「あ、ああ……」

ヴィータが心配そうに声をかけてくる。それにシグナムは生返事

で返した。

「やれたかな？」

「あの爆発だ。やれたはずだ……!?」

直後に異変に気づく。炎の中で微かに魔力反応を感知したのだ。

「!? ヴィーター！下に気をつけー」

その時にはもう、遅かった。身体を薄紫色の光の輪に拘束され、身動きを取れなくされてしまっていた。それに驚いていると、すさまじい風と共に眼下の炎が吹き散らされていく。そこにあつたのは、風の盾を身に纏う女性と、甲冑姿の少年。

「ふう……危ない危ない。まさか、炎の中に転送されるなんて……ま、いいや」

浮かぶ少年はそう言うと、その手に弓を構え、シグナムとヴィーターに向ける。少年の周囲に七つの魔力スフィアが回りながら展開される。

「悪いけど、お話し、落としてから聞かせて貰う！」

魔力スフィアが少年の周りを回転し、手にした弓には魔力がチャージされてゆく。シグナムはバインドを破壊するため、その身に鎧を纏う。

「くっ……！ならば！」

《パンツァーガイストツ！》

赤紫色の光を纏い、バインドに罅を入れると、急いでレバンティンを抜刀しながら、ヴィーターの前に飛び出す。逃げる暇はない。それ故にシグナムは少年の攻撃を切り裂いてしまおうと考えたのだ。

「行くぞレバンティン！」

《エクस्पロージョン！》

その声に応じ、レバンティンはその身に炎を纏う。

その下で少年は弓弦を極限まで引き、グリップのトリガーを引く。

「シューティングスター……」

その瞬間、魔力スフィアから、無数の魔力弾が放たれる。それらは、寸分違わずシグナムめがけて空を駆け抜ける。

シグナムはそれらをシュランゲフォルムにしたレバンティンで弾

く。数発は誘導弾のようで、刀身をすり抜けるようにシグナムを襲う。それは対した威力ではないため、耐えることができた。

「この程度で!!」

「ブラストッ！」

少年の叫び声が響き渡る。その瞬間、弓弦がその手から離れた。直後、鏃の先端から光が放たれる。それは真っ直ぐシグナムの胸めがけて襲いかかる。

光がシグナムを包み込んだ。

復活と愛憎と満開の雷桜

「空の上だね……」

「あはは、落ちるのはこれで何回目かな」

転送魔法が解除され、落下してゆく二人の少女。高町なのはとフェイト・テスタロッサの二人。彼女らは、それぞれ違う反応をした後で、各々のデバイスに頭を下げる。

「ごめんね、レイジングハート。いきなり本番になって」

《お気になさらず。私は、あれだけの苦しい修行に耐えた貴女を信頼してますから》

「バルデイツシュ、やれるよね？」

《YES—sir》

この一週間をなのはとフェイトはただ、無闇に過ごしていない。レイジングハートの言ったように、苦しい修行を身体に無理をしない程度に、想也のもとで修行したのだ。何度も地面に叩きつけられ、土を埃を被り、水に濡れ、泥で服を汚し、雨霞のように降り注ぐ弾丸を駆け抜けたそんな一週間だった。

「おかげで、自分の使いたい魔法がわかった。私達があの人たちにしてあげたいことを」

「うん。その気持ちは……初めてのときと変わらないッ！」

自分が初めて魔法を扱ったときのことを思い出しながら、レイジングハートを手の平に乗せる。

フェイトも同じ気持ちでバルデイツシュを手取る。

なのははユーノを助けるために

フェイトは母を助けるために

それぞれ対象は違うが、他人のためにデバイスを、そして、魔法を使ったのだ。そして今もその対象は他人。誰かを傷つけないため、そして、誰かを傷つけようとする人を止めるため、彼女たちはデバイスを光に翳す。その目に迷いは……ない。

「レイジングハート・エクセリオン！」

「バルデイツシュ・アサルト！」

「セーツト、アーツプ！」

その声と共に二人の身体を桜色の風が吹き、金色の雷光が降り注いだー。

シグナムに向かっていった矢は首筋を掠めた。彼女は撃たれなかった。否、正確にはその一撃は外されたことを知った。何故なら、想也が得意げな表情をしていたからだ。矢の向かった先はあらぬ方向。彼女の後ろにある結界の壁。その攻撃を外した理由も分からず戸惑っている、不適な笑みを浮かべた想也が意味深な視線を壁に向けて立っていた。

「……」

「何故……外した？」

シグナムの問いに想也は指で先程、矢の打ち込まれた場所を指さす。気になって振り向くシグナム。直後、金と桜の極光が想也の傷つけた結界の壁を外側から内側へぶち抜いた。直後に爆発が起きる。その光景をシグナムは睨みつけるように見つめた。

「僕はあくまで時間稼ぎ……この女性の救出が第一優先。本命はこの二人さ」

その指の示す方向には、桜と金の二つの輝きを纏い、空中から降り立つ二人の少女の姿があった。

「あいつら……ッ！」

「新装備を整え、復活したか……」

想也の攻撃を受け、被弾していたヴィータとザファイラがシグナムの隣に駆け寄る。なのはとフェイトの姿が前回よりも、より戦闘に特化している姿に変わっていることに、ヴィータは憤りを覚えた。

「遅くなつてごめん。想也くん」

「遅れた分はキツチリ取り返すよ」

少女から戦士へとその装束を変えた二人。なのはの手に携えられ

たレイジングハートは、その名に『最高』の二文字が加わり、より戦闘に特化した姿へと変わっている。

フェイトの手に握られたバルディッシュはその姿こそ変わらぬものの、『強襲』の名を与えられるにふさわしい仕様変更が成されている。

「後は……任せた方が得策か」

「うん。なるべく話してみる。想也は小狼達を。多分、その方がいいから」

「わかった……無茶すんなよ」

二人に騎士の相手を任せ、想也は夜蘭の隣に降り立つと、その足元に魔方陣を展開する。

「失礼します。彼女たちに襲われないように、保護させていただきます。よろしいですか？」

「ええ。それもまた一興。いいですよ」

（つかみ所のない正確だ……まあいい。さっさと送って、小狼のほうを見に行かないと）

そう思いながら、想也は夜蘭の手を掴む。そして、二人の開けた穴に狙いを定めると、身体に魔法を纏う。

「しっかり捕まっけて下さいよ……魔力ブースト……ソニック・ムーブ」

その瞬間、想也は音速の速さで反対側の穴の開いた壁めがけて飛んでいった。夜蘭を抱えて。

結界の外をさくらと共に星の杖に跨がり飛ぶ小狼。さくらの背中から生える魔法の翼を使っているため、星の杖はある意味椅子替わりのようになっている。

「さくら、お前はある程度の距離を取って待っていてくれ」

「どうして？ 私と一緒に行くよ？」

「……」

桃花と小狼は従妹だ。苺鈴とは違う小狼の母方の。その彼女はとある事件を起こして、李家を追われ、中国の奥地の岩牢に閉じ込めら

れていたはずだった。その彼女がここにいることに小狼は嫌な予感がした為、この件にさくらを関わらせたくなかったのだ。

そんな小狼の思いを知らずに、さくらが優しい笑みでそう言った。小狼はどう答えればいいか分からず、押し黙ってしまふ。そんな彼の態度にさくらが可愛らしく小首を傾げる。小狼は堅い表情を浮かべ、ぶつきらぼうにこう告げた。

「？」

「大丈夫。すぐ戻る」

そう言い残すと、自分の不器用さに呆れながらも、杖の上から飛び降り降りる。風華を唱え、着地の衝撃を抑えると、軽い靴音共に結界の上に降り立った。目の前には、巨大な大剣を担ぐ少女が立っていた。その少女が桃花だった。五年ぶりに出会った彼女は桃色の長髪をお団子にして丸めた髪型にチャイナドレスを纏っていた。容姿は前に会ったときとさほど変わっていない。

「ええ。久しぶりですわ。小狼お兄様」

桃花がニコリと微笑んだ。その笑みを見ただけで、小狼はゾツとした。その理由は何故か分からない。

もし、この場に想也かクロノ、もしくはエリオルがいればこう言っただけだ『純粋な悪意の無い殺意を平然と振りまいている』と。

そんなものに出会ったことの無い小狼は寒気と悪寒を無視しつつ、桃花に挨拶しながら、訊ねる。

「ああ。久しぶりだ。桃花。所で……何故この人達を殺した……？」

ありきたりな……いや。誰もが彼女の行為を見たらそう訊ねるだろう。だが、彼女はニコリと笑って答えた。

「ええ……私の曾祖父の代からの願望を叶えるために、あの闇の書の覚醒が必要なのですわ」

「……なるほど。だが、李家ではあの闇の書には本家の現当主である、夜蘭……母上しか関わるな、と『あの事件』の後にそう、言われていたはずだ。それを破るのなら……」

小狼は護符を魔力変換し、剣に変換させる。同時に小さく呟いた。

「踊れ……雷帝！」

その呪文で刀身が緑色の雷に彩られる。鉄に反応して、スパークを起こすそれを見て、桃花は不適に笑う。

「面白そうですわ……！」

そう言うと、桃花は大剣を肩に担ぎ、足を一步前に出した。その瞬間、桃花の姿は消える。小狼はそれに驚くことなく、構えを解くと、耳を澄ませる。直後、小狼は後ろを振り向きながら、横風に剣を振るう。ガキインッ！と甲高い音と共に後ろから斬りかかってきた桃花の持った大剣とぶつかり、火花を散らす。

「さすがですわ！瞬足の速さに対応出来るとは……！」

「今度はこちらが行くぞー！」

魔力で一時的に腕力を強化し、重さと強度で勝る大剣を押しつける、体勢を崩した桃花めがけて、シンバルキックを叩き込み、裏拳、掌底、アッパーを繰り出す。その流れるような攻撃に、桃花は圧倒されつつも、最後のアッパーを打撃方向に流されることで、ダメージを軽減。流された勢いを利用して、距離を取る。睨むように空を見上げる小狼に対し、手元の大剣をクルクルと手首を返して遊ばせる桃花。その表情には、小狼の攻撃が効いた様子はなく、嬉しそうな笑みを浮かべていた。

「何がおかしい？」

「ふふふ！だって！小狼お兄様と死合を出来るんですもの！喜ばない人はいませんのよ」

気色悪い嬉しそうな笑みに小狼は不快そうに眉を顰める。それを見た桃花は口を三日月のようにパツクリと開き、さらに笑みを深める。

「小狼お兄様の实力は大体わかりました……すぐに私の虜にしてあげますわ……」

そう言いながら取り出したのは、黒に桃色の縁取りが施された錠前。彼女はそれを艶めかしい手つきで、愛おしそうに撫でると、口づけする。

「♡姫士、転生！」

その掛け声の後で、彼女の体を無数の光が包み込んだ。その直後、そこに立っていたのは……

漆黒の鎧に桃色のチャイナドレスを纏った不釣り合いな鎧姿の桃花が立っていた。

「ふっふふーお兄様ーこの私を倒すことができますかしら？」

挑発するように鋒を小狼に向け、そう豪語する桃花。小狼は表情を仏頂面に戻すと、数枚の護符を手にした。

「一つ聞こう……」

「ええ。なんなりと」

「この襲撃は誰の差し金だ？」

「それを知っていて教えるとしても？」

無駄な問いかけと言わんばかりに笑う桃花。小狼はそう答えるのがわかっていたため、そうだな、と言うと小狼は剣を水平に構えた。その目は冷静に彼女だけを見つめていた。

琥珀色の結界が夜を照らし、黄昏の空間に変わっている。その下では、白いドレスに身を包み、その手に姿の変わった相棒を持つ、高町なのはの姿と、黒いマントを身につけた、フェイト・テスタロッサの姿があった。

その二人の前には、シグナム、ヴィータ、ザフィーラが立っていた。こちらは、いつでも動けるように、それぞれの愛機を構えている。

高層のビルとビルの屋上に立つ、戦士達。彼女達の溝を表すかのように、深い谷間を作っていた。

暫くしてシグナムは悲しげな視線を二人に向け、諭すように言う。

「我々はもう、おまえ達に用はない。早々に立ち去ってくれればいいのだが……」

「いいえ。私達は戦いに来たわけじゃないんです」

「なんだと？」

予想していた答えと違う答えにシグナムは少し、驚いて聞き返す。

それはヴィータも同じなようで、すかさず、その理由を聞き返した。

「じゃあ、何だっつてんだよっ！やる気の新武装ひっつけて来て、いかにもやる気満々じゃねーか！」

「なっ?!いきなり襲ってきた子がそれを言う!?!」

「……うっせえ!ちびガキ!ベルカの諺にこんなもんがあるんだよ!」

ヴィータの言葉になのはが言い返すと、ヴィータは誇らしげに胸を張って諺について話す。

そんな彼女の態度を見て、ザフィーラとシグナムは密かに念話をするのだった。

(ザフィーラ、ヴィータは確か……)

(ああ。勉強が苦手だ)

(だろうな……変な墓穴を掘りそうだが……)

(……少し様子を見よう。)

二人は念話を切り、目配せをした後で、ヴィータとなのは達のやり

とりに見る。

暫くして、ヴィータは自信満々に指先を天に向け、言った。

「和平の使者なら槍は持たない」

……？

再び沈黙が境界内を支配した。聞こえてくるのは、境界の外の上部で、剣戟音とくぐもった叫び声を上げる小狼の声のみ。あとは、外界から吹き抜けてきた風の音のみ。

なのはとフェイトは、首を傾げる。どう言う意味かわからないようだった。

一方、ザフィーラとシグナムはそれぞれ、頭に手を突き、深いため息をついていた。いかにも、やっちゃまったよ、こいつ、的な雰囲気を出している。

そんな空気を読まずに、ヴィータはその意味を述べた。

「話し合いをしようつてのに、武器を持ってやってくる奴が居るか馬鹿って意味だよバーカ！」

その言葉を言った瞬間、その場にいる全員から、すさまじいツツコミが入る。

「いきなり襲いかかってきたのそっちなのに!？」

「ヴィータ、お前は我らが主と騎士の誇りに泥を塗るつもりか？」

「それに、それは諺ではなく、小話のオチだ」

「……………」

顔を真っ赤にして押し黙るヴィータ。手を握りこぶしにして、恥ずかしさのあまり、振るえていたが恥ずかしさを振り切るようにグラ―ファイゼンを振りかざし、二人に襲いかかる。

「コノヤロオツ!こっちはハナからおまえらにわかって貰うつもりは、ねーんだよっ!」

それを見たフェイトは舌打ちをする。なのはも苦笑いを浮かべて、防御の体勢を取った。

「交渉は決裂!フェイトちゃん!」

「うん。なのはは紅い子を。私はあの剣士の女の人を!」

互いに肯くと、フェイトは宙に浮いたまま、静観するシグナムの元

に向かう。

当のシグナムはそれを仁王立ちで待っていた。フェイトはシグナムの前に立つと、レバンティンを抜き払う。

「お前からはまだ、魔力を蒐集してなかったな……」

「魔力蒐集……なのはの魔力が少なくなつたのは……」

「そうだ……。我らの持つ闇の書的能力。お前もその糧になつて貰おう。我が主の未来のために」

「そんな犠牲を払って生む未来は……」

シグナムの言葉をフェイトは断ち切るようにバルディッシュを構えた。リボルバーが回転し、葉莢が飛び出る。その瞬間、斧が展開し、その峰の部分から、三日月と見紛うほどの巨大な金色の刃が展開される。それを肩に担ぎ上げ、シグナムに斬りかかる。対するシグナムもレバンティンに炎を纏わせ、振りかぶる。

次の瞬間、雷と炎がぶつかり、大爆発を起こした。

漆黒の瘴気を身に纏つたかのような、冷たい冷気が辺りを覆つた。冬なので、寒いのは当然なのだが、それとは性質の違う寒さというところに、小狼は気づいていない。握る剣は知らないうちに震えており、胃の中はまるで、鉛の塊を入れたように重く感じた。これが不安というものだと言うことを、彼は気づかない。故に、頭を軽く振り、息を正すと、両手で剣を握り、軽く振りかぶると、ゆっくりと構える。その目は少しばかり目の前の闇に怯えているようにも見えた。

「ふふふ。お兄様。怖がつて当然ですわ。この鎧は血桜の鎧……数百年に渡つて人の生き血とある感情を吸い続けたのですから……」

いやらしい笑みを浮かべて、桃花はそう語ると、桃花は足を一步踏み出す。その瞬間、彼女の身体は一瞬にしてその場から消えた。驚いた小狼は辺りを見渡す。すると、その彼の身体を誰かが抱きしめた。

「ふふふ。捕まえましたわ……お兄様」

柔らかくも力強い締め付けが彼の身体を支配した。背中越しに彼は桃花に問いかける。

「一体、何が目的だ？」

「ふふふ。小狼お兄様をあの小娘から解放してあげますわ」

そう言つて、彼女は小狼の耳に……甘噛みを……

――しなかった。

――否、出来なかった。

何故なら、それを阻むように、氷の矢が打たれたのだから。

桃花は忌々しげに氷の矢を掴むと、それを魔法で生み出した黒い炎で溶かす。そして、空を睨みつける。そこには、純白の翼と白銀の長髪を生やした、青年……月が飛んでいた。

「主の悲しむことは、させられぬな……それに……」

月は桃花の纏う鎧を一瞥すると、問いかけた。

「その鎧は一体、誰が与えた？」

桃花はその問いに答える代わりに、舌打ちをくれてやると、御符を取り出してこう呟いた。

「邪魔をして……ッ！黒き竜よ、炎の化身となりて、我に徒なす、使い魔を焼き払え……黒竜徒焼！」

黒い炎はその形を巨大な竜に変え、月に襲いかかる。月は翼をはためかせ、上空へ逃れた。しかし、黒竜はそれを追うように、彼へと迫る。

「月ッ！纏えッ！火神ッ！」

月を助けるため、桃花に抱きつかれていた小狼は、両腕に電気を纏い、無理矢理に桃花を振り払い、剣に火を纏わせる。そして、振り向きざまに、斬撃を放った。

「紅蓮！火炎斬！」

熱風と共に横一文字の巨大な炎の斬撃が放たれる。桃花はその斬撃を真面に受ける。その一撃で集中力は途切れたのか、月を襲っていた竜は消滅。流星に熱量が熱量のため、斬撃を真面に食らった腹部の鎧には横一文字に鉄が熱せられ、赤く光った後があった。

「咄嗟の大技で……流石お兄様。この鎧をここまで傷つけるなんて！
益々！食べたくなりますわっ！」

舌舐めずりをすると、彼女は大剣を構えようとした。しかし、突然、
身体に痛みを覚え、くっ、と苦虫をかみ潰したような表情を浮かべる。
(やはり……仕方ありません。ここは一旦引きましょー！)

大剣を背中に収め、桃花は地面を蹴った。

「ふふふ！お兄様、私は用事を思い出しましたので、これにて失礼しま
すわ！」

そう言うと桃花は転送魔法を使い、その場から消えた。残ったもの
は、何もない。

小狼は闘いが終わったことに安堵し、剣を護符に戻す。そして、静
かに結界を眺めた。その下では、未だになのは達が闘っていたのだ。
「……いくのか？」

月が涼やかな声で訪ねてくる。それに対し小狼はああ、と唸るよう
に返事を返した。

「何故、闇の書を蒐集するのか、それが気になる」

「そうか。ならば、術者を探せ」

「術者を？」

「そうだ。結界があるということは、当然、それを維持するものが必要
だ。そいつを探せ。主と共にな」

「……わかった」

小狼は空を見上げた。そこには、心配そうな面持ちで二人を見つめ
る、さくらの姿があった。彼は小さく呪文を唱えると、浮かび上がる。

「風華……」

ゆっくりと、ケルベロスに跨がるさくらの元に近寄る。さくらは不
安げな面持ちで小狼をジーツと見た。小狼は思わずたじろいでしま
う。すると、ケルベロスが面白そうな口調で小狼をからかう。

「小僧、あの小娘に耳、ハミハミ舐められとったやないか。ったく、
さくらがどんなきも……へブツ！」

「小狼くん？あの女ことどう言う関係？」

余計な一言を言ったケルベロスを星の杖で殴る（パワー附加の状態

で」と、さくらは何とも言えない覇気を纏って、小狼に問う。小狼は、ああ、と頷くと、冷静に答えた。

「あいつは俺の父方の従姉妹だ。名前は凰桃花。お前が疑ってるような関係じゃないから、安心しろ」

「でも、耳ハミハミされてたね」

「うっ！……それは、まあ、その……」

どう答えていいかわからず、言葉に詰まる小狼。すると、そんな彼に救世主が現れた。

「申し訳ないですね。さくらさん。愚息は、昔からあの子にああされてしまうんです」

紙で折られた鳥がそう言いながら、小狼の肩に止まった。さくらは、それに驚き、素っ頓狂な声を上げる。

「ほええええっ?!?折り紙が喋った!?!」

「なるほど……式神やな。ってことは、小僧の母親やな?」

いつの間にか復活……というか、ケルベロスからケロちゃんに戻ったケルベロスは、折り紙に問いかける。折り紙は、ええ、と頷くと、その身体を広げた。

「さあ、この紙に書かれた魔方陣に触れてください。彼の箱舟まで飛ばします。そこで、詳しいことについて話しましょう」

その言葉に三人は頷くと、折り紙の言うとおりに従い、結界を後にした。

Divine琥珀を撃ち抜く、桜色の極光―Bus
ter

慌ただしいアースラ艦内は警告音や通信士の話し声で少し騒がしくなっている。クロノは空座の館長席に座り、戦況を観察しながら、時折各セクションの状況を横目で確認する。本来であれば、自分が現地向かい確認するのだが、相手の力が未知数であり、並みの魔導師では太刀打ちできないとなると、無闇矢鱈にアースラの戦力を手薄にすることは出来ない。もしかしたら、こちらを狙われてしまうからだ。更によえばクロノは休暇中のリンデイに代わり、艦長代行を務めている身。おいそれと、空座にするわけにはいかない。

「結界破壊班は直ちに負傷者の搬送を！なのはとフェイトが来たんだ。余計な手出しは無用。いつまで？別命あるまでだ！」

「なのはちゃん、フェイトちゃんが騎士と戦闘を開始！」

「想也さんが、民間人を連れて帰投。すぐさま、救護室に運ぶそうです！」

「わかった！想也にはそのままいいと伝えておいてくれ」

次々上がる報告にクロノは無表情でため息をつきながらも、モニターに映る戦地の二人に小さな声でこう言った。

「頼むぞ……二人とも」

シグナムとフェイトが大爆発を起こしてぶつかり合ったその直後。

ヴィータと闘うため、距離を取るなのはは、呆気に横目でその様子を見ていた。

「!!フェイトちゃん！」

《マスタートー!》

「余所見してんじゃねえーっ！」

いきなり起きた大爆発に驚くなのは。そこへ、ヴィータが怒号と共に突っ込み、グラーフ・アイゼンを振り下ろした。なのははそれを右手を広げて、シールドを展開し、受け止めた。しかし、運動エネルギー

を利用し、勢いに乗った一撃になのはは押し込まれてしまう。ようやく、ビルの屋上に着地したなのはは、魔力ブーツのピンを全力で振り抜いた一撃を受け止められ、ヴィータは苦虫を噛みつぶしたような表情を浮かべる。

「かつ……硬エツ！」

ギリギリと火花が散る。なのははそれを苦もなく受け止めながら、レイジングハートを叩きつけるようにヴィータに向かって振るう。

「ツッ・スマッシュャーッ！」

桜色の光がヴィータを勢いよく吹き飛ばすが、その不意打ちにもヴィータはしつかりと受け身を取り、防いでいた。

ヴィータは鉄球をつかみ取ると、それを空中へ展開。12発の鉄球を左右に振るったグラーフアイゼンで打ちつけ、6発ずつ、なのはめがけて打ちつける。なのははそれを見て、呼吸を整えると、レイジングハートを両手で構える。彼女の目にはレイジングハートから投影された、ターゲットマーカーが映し出されており、捉えた12個の鉄球をマルチロックオンする。そして、トリガーコードを唱えた。

「アクセルシュート！」

放たれた12発の弾丸で別々に動く鉄球をそれぞれ迎撃させる。

その間にヴィータは巨大な鉄球を作り出しており、それを勢いよくなのはめがけて撃ち放つ。

突然の攻撃になのはは驚いてしまうが、すかさず、ブーツのフライヤーフィンを展開。軽やかに空中に飛び上がると、後方へ飛翔しながら、レイジングハートをモードチェンジ。バスターカノンモードに切り替える。

「いくよ、レイジングハート！想也くん直伝！」

《ええー派手に行きましょう！》

左手をロッドに、右手をトリガーグリップに手を掛ける。直後にカートリッジを2発ロードし、ショートバスターを放つ。それは巨大な鉄球の側面を掠める。外したと思われたが、なのはは笑みを浮かべており、さらにカートリッジを2発ロード。バスターを放出したまま、体を捻る。すると、砲撃がしなるように、移動し、鉄球を薙ぎ払

うように横一線に砲撃が放たれる。この薙ぎ払う砲撃の名は――
「ハルバード！バスター！」

なのはから逃れるべく、ヴィータはコメート・フリーゲンを放ち、それを囿として、結界からの離脱を図ろうとしていた。そのため、本来はギガント・フォルムにして放つこの攻撃を、ハンマー・フォルムで打ち込んだ。

「いまのうちに！」

《こっちはもう、撒けそうだ！結界から離脱する！》

《ええ。わかったわ！バレないように気をつけて！シグナム！》

《こちらは暫くかかりそうだ！》

《俺がそっちに向かおう》

三人に連絡を取り、各々に離脱の準備を終えたヴィータは、思念通話でそれぞれに連絡を取ると、結界の外殻めがけて飛ぶ。しかし、その脚は彼女の後ろから聞こえてきた轟音によつて、止まる。恐る恐る後ろを振り向くと、そこには真つ二つに砕けた鉄球が落下していた。その割れた衝撃で出来た向こう側では、桜色の魔方陣が、その存在を示すかのように、煌めいて見えた。

「まじかよ!?……でも、この距離なら、いくら何でも撃てないだろ！」

そう高を括るヴィータ。しかし、彼女の選択は間違っていた。

鉄球を砕いたのはは、硝煙の向こうにいるヴィータにその砲口を向ける。その目に迷いはない。

右足踏み出すと、魔方陣が足場となって展開。

余剰魔力から形成された魔力翼がシリンダー先から展開される。それは、魔力を放出する際の勢いを相殺するための、スタビライザー。そして、環状魔方陣が砲身の周りを周り、魔力の砲身を形作る。それは、魔力をより遠くへ放出するための準備。

レイジングハートはなのはの為に、照準の補助・補正を行い、精密狙撃の下地を整え、カートリッジのロードを行う。

